
こころこ

Fill

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こころこ

【Nコード】

N1942D

【作者名】

Filll

【あらすじ】

平凡な少年が多重人格な天使に出会い、契約させられる話。

第一話 天使

こころこ 第一話 エンジェル 天使

キーコンカーンコン

「やっと終わったよ、帰る帰る」

(俺、ながやま永山 やしち八志智は東京に住むただの高校2年生である。んで家族は俺を入れて4人、仕事の都合で広島にいる。俺は高校生活を優雅に過ごすべく残ったわけだが、1つ問題が・・・)

「永山くーーーーーん」

ダダダダダダッ・・・

遠くから近づく恐々しい足音が・・・

(キターーーーーッ逃げ・・・・・・・・!? 腕捕まれたーーーー!! ヒーーーーッ)

「さあっ!! 今日こそ我が漫画研究部、略して漫研に入ってもらわっ」

(こいつは漫研部長でクラスメートの菊池 きくち 奈留 なる。赤渕めがねがマジ目立つ!)

「なんで俺が漫研なんかに入んないといけなんだよっ」

「また同じクラスになったんだし、何かの縁よっ! それに家一人でしょ。危ないわよっ」

(あ・・・・心配してくれ・・・・て・・・・)

「それに漫画とかだとそーゆー子って不思議なこと起こるし!」

(ねえーーーーーつつつつ!!)

「誰が入るかっ」

「あっ! ちよつとお!!」

八志智は走ってその場を後にした。

（俺が漫研なんかに入るかつーのっ！！……うん
？……何か落ちて……）

八志智は足元に落ちていたものを拾い上げた。

（十字架？　いいいや先の方がギザギザになってる……鍵か……
……にしても変な鍵……アンティークか？　ま、一応交番に届けるか。）

鍵を手を取ったまま八志智は歩き出した。

（この交差点渡れば交番か……にしても長げえーな信号……
……）

ドンツツツ！！？

（へっ？？）

八志智は誰かに押されて道路に放り出されてしまった！？　車がすごいスピードでこっちに向かって来る！！

（……やべえっ！！！！俺死ぬっ！？　まだ青春終わってねえ
のに死にたくねえ！！　誰か……誰か……
……助けて……
助けて！！！！）

八志智はとつさに鍵を持つてた手を前に出した。

カチャツ……ペア……ンツ！！

まるで割れたビンから妖精が飛び出すかのように白い翼、さくら色の髪、黄色い瞳の女の子がでてきた。

（だ……れ……でも……？……て……
か……だれ……でも……い……から……
……た……す……けて……）
一瞬、時間が止まったようだった……。

「お……て……よ……う……。お……
……て……よ……う……。」

（だ……れだ？？てか俺……。死んだのか？？……。や
べっつおぼえてねえ……。）」

「お・き・て・よ・う！！！」

その声で八志智は目がさめた。あたりを見渡すとさっきの女の子が
泣き出しそうになりながらも隣りに立っていた。

「よかったあ！やっとなめさましてくれて！！」

女の子は涙を拭き、笑顔で言った。

八志智はもう一度あたりを見渡した。

「ここは……。？」

「さっきのこうさてんのちかくのこうえんだよ」

そういうと彼女は八志智の目の前に行きこういった。

「助けてってこの鍵もちながら願ったでしょ。だからでてきた
の。願いを叶えるために……。っていつでも対価はもらうけ
どね。」

（なにいつてんだこの女の子は？？ツッコミどころ満載だが……
ここは話を聞こう。）

「対価……。ってなんだ？」

「わたしが人間になるための必要な力をあなたからもらいます。
そのかわり対価にあった願いをわたしが叶えます。しかも……。
・パンパカパーンッ！あなたで人間になれる力が揃いまーすっ
！！……。」

（……。なんじゃそりやつ！！全然わけ分かんね
えつつっ！？……。なんかのぼったくりということもある
しあまり深く聞かないでおこう……。）」

「……。てことであと左眼の力だけなんでもらうねえ。」

そう言うとき彼女は八志智の左眼にそ……。と右手をかざした。

そして、右手を八志智の左眼から離れた途端、丸い水晶のような光

り輝く玉が出てきた。

「いただきまーすっ!!」

そう言っていると彼女は、その玉を口に放り込むかのようにして食べた。と同時に八志智の視野が途端に半分になった。

「ちよつと待て――――っ何した――――っ!!」

「なにしたらって……力もらっただけだよ？」

（だからなんなんだよ——っ力つて————）
て聞いてもまたわけのわからんことを言い返してくるんだろーなあ・
・・誰か話しが分かるやつ・・・・・!!・・・・・
・いや・・・やつには・・・・・でもこの際・・・・・）
「あ!! もらった力おおすぎたかも・・・・・。どうしよう・
・・・・ぞだ!! そのぶん、期間ふやせばいいんだ!? ・・・・・え
と・・・・・このぶんだと・・・・・だいたい2年間くらい・
・・・・かな・・・・・?」

(なんかわけわかんないこと言ってる……っ)

「……………で、きょうから2年間よろしくおねがいしまあす!……………おうちはどこ?。」

（勝手に泊まろうとしてるし――――ツツツ！
！！！！！！）

「……どうしたの？あ！そか、じこしょうかいまだだもんね……アヴィスっていいます！」

(そーゆー問題じゃねーっつ

グルンツツツ!?

(・・・・・?)

アヴィスは首を大きく回すとさっきまで黄色かった瞳が緑色に変わった。

「や——っとなられたよっ！つか、こどこだ？？」

そういうとアヴィスはあたりを見渡し始めた。

「おっ！新しい契約者か！？こいつで最後かぁ・・・長かったなー・・・ってことはこれで人間になれるじゃーんっ！！

うおつつっしゃーーーーー!!!!!!!!!!」

（なにがどーなつてんだーーーーー!!!!!!誰か説明してくれーーーーー!!!!!!）

「んで、どーゆー契約したんだ??なんか欲しいもんがあるとか?」

（おまえが契約勝手にしたんだろーーーーー!?!）

「どした?早く言えよ!!」

「えと……たしか……2年間助けるとかどうとか……」

「なんだとーーーーーっ!!そんな契約しやがったのかあのアヴィスのヤローーーーーッッ!?くっそ、そんなんじや人間になるのまだまだじゃねえかつ!!」

（何言つてんだこいつーーーーーっ!!?てか今何時だっ??）

八志智はとつさにケータイで確認した。

（6時56分か……やつらはまだいるな!……やつらのところに行くかつ!!）

ガシッッ!!

八志智はアヴィスの手を強く握り走り出した。

「ちよっ……どこ行くんだよっ!!」

「学校だよっ!!!!!!」

「はあ?」

「とにかく付いて来い!!」

「うおっ!?危ねーぞ!!」

ガンッッ!?

八志智は電柱にぶつかった。

「だから言つたろ。てかちゃんと見ろよな……」

「おまえが左眼の力取つたせいだろっ!!!!!!!!!!いつてえ……」

その後も八志智は店の看板、バス停、人、また電柱……とい

ろんなものにぶつかりながらも学校に着いたのだった。

「菊池——いるか——??」

八志智は勢いよく漫画研究部の部室のドアを開けてそう言った。

「いるけど?・・・まさかっ!?我が漫研に入る決心がついたの

!..」

「ちげえーっ!」

「な——んだあ・・・ブーブー・・・んじゃ何しにきたのよ。」

「この子のこと・・・!!」

そついうと八志智はアヴィスを前に突き出した。

「この子・・・・・・ってだれのこと?」

（へ?・・・・・・）

「あ・・・いうの忘れたが、契約者以外俺のこと見えねーし声も聞こえねえぞ。」

「それ早く言えよ——!!どーすんだよ——?」

八志智にはもはや絶望感が満ちていた。

「なに一人で言ってるの??もしかして頭のネジ取れちゃったの!?!」

（そーもなるだろ——!!——!!勝手に目ン玉取られた挙げ句、うちに泊まるとか言ってるんだぞ——!!——!!）

つんつんっ!!

（・・・・・・?）

「翼しまえば皆に見えるようになるぜ!..」

（それ早く言ってくださいよっつ!!——!!あゝ焦った~~~~~てか俺が頭のネジ取れたと思われて人生終わるのかと思ったぜえ・・・）

「・・・でことで服貸せっ!翼しまうと式服消えちまうんだよっつ!!..」

（式服ってそのひらひらの人形みたいな服のことか??）

「菊池」なんでもいーから服あるかあ？」

「去年の文化祭に使ったメイド服ならあるけど・・・?」

「それでいいから貸してっ!」

奈留は部室の端に置いてあったダンボールから服を取り出し八志智に渡した。

「これでいいだろ?おまえ着替えるよ・・・ボソッ」

そう言うのと八志智はアヴィスに服を渡した。

「おまえおまえ言うなっ!!俺様にはちゃんとビスって名があんだっ!!」

（ビ・・・ス・・・?ってアヴィスじゃなかったっすか
ーーーーーっ!!!!）

「おまえアヴィスじゃなかったっけ??」

「だからおまえ言うなっ!!俺様はビスで丁度今から着替えるためにでるのがアヴィス!・・・てか名前ぐらい覚えろよっ!!!!」
グルンツツツ!?

ビスは首を大きく回し、瞳を緑色から黄色に変えた。

「あれ?ここは?・・・あ・・・ビスにかわったんだっけ?」

「なんでもいーから着替えてくれ。」

「え・・・?・・・あ!・・・はい。」

アヴィスは翼を大きく広げ、自分を包んだ。そして、すぐに翼を通常の大きさに戻した。あっという間に着替えが完了したようだ。

「・・・!!!!!!」

いきなり部室がざわつきはじめた。それはそうだ。皆にはアヴィスが見えておらず、服だけが浮いているのだから。

「め・・・めい・・・メイド服が浮いてる~~~~!!
透明人間だ!・・・!!誰か写真撮りなさいっ!!」

奈留がそう言うのとカメラを持ったオタクのような子が出てき、いろんな角度からアヴィスを撮った。

「あわわつつ．．．つばさけすのわすれてたーーーー！！いまからけすねえつつ！？」

シユウ．．．．．ン

「．．．．．！?!?!?!?!?」

今度は突如現れたアヴィスを見て皆、呆然と立っていた。

「アヴィスです！みんなよろしく〜！！」

その声だけが部室に響き渡った。

「．．．ど．．．．．ど．．．．．どこから出てきたのーーーーっ?!?．．．宇宙人？それとも魔法使い？ねえねえ??」

奈留は興奮して質問攻めに言った。

「萌えーーーーっ」

そう叫びながら、さっきのカメラを持っていた子がアヴィスをささず撮りまくっていた。

「ううっ．．．こうゆうのがて．．．。ビスかわってえー
ーーーー！！」

グルンツツ！！

「．．．．．たくっ．．．なんなんだよっ．．．．．勝手に代わりやがって！！話しづらいアヴィスからしろよ！！！！」

「．．．．．!?!?!?」

部室にまたも静けさが漂った。

「．．．．．まさかっ!．．．．．人格変わった．．．．．?．．．．．てことは不思議ちゃん&多重人格者ーーーーっ!!まさに一石二鳥
!!!!」

奈留は興奮しまくって頭から湯気がでそうになっている。

「何でもいいから早く説明しろ!!」

八志智はそうビスに言った。

「へいへい。」

ビスはめんどくさそうに言うと、やっと落ち着き始めた漫研の皆と八志智に分かりやすく説明し始めた。

（数分後）

「つまり・・・あなたたちは人間になりたい・・・天使・・・
・・・なわけね・・・」

奈留は全てを把握したかのようにそう言った。

「そう・・・だから俺たちは人間のあらゆるパーツの力を集めて
る。そうすれば人間になれるから。」

「でも・・・永山君の左目で最後なんですよ？・・・てことはもう人間じゃないの？？」

「一応全部集めたけど・・・最後の契約が終わるまでは人間になれない・・・。」

「そんなの無視しちゃえばいいじゃんっ！！」

奈留はふざけてそう言った。

「・・・俺様もそう思ったんだけど・・・たぶん・・・フェニックスが許さねえ・・・。」

「・・・ふえにつくすう・・・??」

皆、首を傾けた。

「俺たちを天使にしてくれたやつだ。・・・まあそれなりに対価は払ったが・・・。」

「対価って・・・？」

ビスは少し間を置いてこう話し出した。

「・・・俺様たちはもともと・・・モノなんだ・・・。」

「モノ・・・って物？」

「そう・・・物だ・・・。んで俺様たちは人間になるためにフェニックスって言うやつを呼んで願いを叶えてもらうようにした・・・。物のときの記憶を対価に・・・。」

「記憶・・・？」

「そっ・・・だからどんな物だったかも知らないし、なんで人間になりたかったかも覚えてない・・・。」

ビスは下を向き、少し寂しそうに言った。

「そうなんだあ……。」

「対価、足なくてアヴィスと半分ずつ払ったから体……一つになっちまったんだよなつ。」

「……いろいろな事情あるみたいねえ……。そだ！困ったことがあったら我が漫研に來なさいっ！いつでも相談にのるわっ！！」

奈留はクルツと八志智の方を向いた。

「……てことで永山君は我が漫研に入ること決定ッッ！！」
奈留はグッ……と八志智に親指を突き出した。

「なんで……そ……なんだ……！！！」

「だって私たちのおかげで話し分かったんでしょ？」

（うつ……鋭いところくなあ……しゃーない……）

「……分かったよ。」

八志智はいやいやそう言った。

「……んじゃ自己紹介しなくちゃね！！……私が漫研の部長、二年の菊池 奈留！！……んでさっきから写真撮ってるのが……。」

「一年、柳葉 三夫です。」

「んで、優秀な私の秘書の……。」

「小井川 未来です。一年生です……。」

「……んで、今入った！！……。」

奈留は八志智を指さした。

（俺もすんのかよ……！！……やればいいんだろ？やれば……。）

「……二年の永山 八志智です。」

「……んで最後に！！我が漫研のマスコットキャラのっ！！……。」

奈留はビスの方を見た。

「…………え？…………俺様も言うのっ！？…………えと…………ビスだ。」

「…………もう一人もっつ！！！」

「…………アヴィスのことか？？」

「そう！その子も自己紹介するのっ！！」

「へいへい…………代わればいいんだろ…………。」

グルンツツツ！！

「……………えと……………アヴィスです！よろしく！！」

「…………よしっつ！！今日はこれくらいにしてしよお！？まだ聞きたいことあるけど、もう遅いし…………。」

そう言くと奈留は帰る支度をした。

「皆も帰るわよっ！！」

奈留がそう言くと、皆焦って帰る支度をした。

「……………ってことは永山君の家に泊まるわけ？」

校門の前で奈留はそう言って足を止めた。

「そうだよ！だってヤシチがアヴィスの契約者だから…………。」

そう言つてアヴィスは八志智の方を微笑みながら見た。

（いきなり俺の名前を呼び捨てか！！…………まあどうでもいいけど…………。）

「あ！！私たち永山君の家と反対方向だからここでお別れね！！」

奈留はそう言つと八志智の隣に行き、耳元でこう言った。

「よかったねえ！だいたいこういうの漫画だと契約者を好きになるのよ！！……………ボソツ」

そう言われて八志智は顔を赤くした。

「んじゃねえ、バイバーイ！！」

奈留たちはそう言つて駆けていった。

「バイッバイ！！」

アヴィスはそう言つて、手を大きく横に振つた。そして、奈留たちが見えなくなると八志智の方を見た。

「・・・あれ？おかお、りんごさんみたいになつてるよお？」

「なんでもない！！・・・帰るぞっ！！」

そついうと八志智は勢いよく走り出した。

「あ！まつてよお・・・。。。」

家に着くと、八志智はアヴィスにこう言つた。

「今日はもう疲れたから寝る・・・。。。。妹が使つてた部屋があるからそこでおまえは寝る・・・。。。。。」

「・・・ム~~~~・・・おまえじゃなくてアヴィスだよお！ちゃんといつてくれなきゃねないっ！！」

「・・・。。。。分かつた・・・分かつた・・・アヴィス早く寝ろっ！！」

「りよおーかぁー~~~~いつ！！」

（あ~~~~めんどくせ~~~~てかこいつと2年間も過ごすのかっつ！？・・・そー考えるとだり~~~~。。。。。）

八志智は足をひこずりながら自分の部屋に入った。

（翌日の朝）

「・・・。。。。ふぁあ~~~~。。。。。。。。ねみ~~~~。。。。。。。。にしても昨日は変な夢見たなあ。。。。。。。。。」

八志智は朝ごはんを食べて学校に行った。

ざわざわざわ

八志智が教室に着くといつもより生徒が騒いでいた。

「・・・・・・どーしたんだ？」

八志智は仲のいい男友達に聞いた。

「なんでも今日、急に転入生がこのクラスに来るらしいぜっ！！
しかも、女だつてよ！女っ！！」

（……………まさかっ！？……………いや……………あれは夢だった
はず……………。）

ガラガラッ

そのとき奈留が教室に入ってきた。そして、あたりを見渡し八志智
を見つけると駆けてきてこう言った。

「あの後、どーなったの??」

「……………あの後って?」

八志智は問い返した。

「だからっ！私たちと別れたあ……………」

キンコーンカーンコーン

ガラガラッ

チャイムが鳴り、先生が教室に入ってきた。皆慌てて席に着いた。

「皆、おはよー！今日は転入生を紹介するぞっ！！……………入っ
てきなさい。」

ガラガラッ

ペタペタペタ……………（足音）

（ま……………まさか……………っっっ！！！！！！）

転入生は教卓の前で足を止めた。

「自己紹介は自分でできるよな?」

先生はそう問いかけた。

「きょうからこのがっこうにてんにゆうしてくるようになりました。
ヤシチのしんせきの永山 アヴィスです！！よろしくうっ！！
！」

アヴィスは自信満々に自己紹介をした。

「おーかわいーこだー！」 「永山君の親戚なんだー！」 「て

か髪の水ピンクー！」

教室がまたしてもざわつき始めた。

（……………明らかに名前おかし……………だ

ろー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！誰かツツコメよー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！
っ！！！！！）

第一・五話に続く・・・

第一・五話 友達

こころこ 第一・五話 友達

「それじゃあ、アヴィスは………鈴の隣が開いてるか
らそこに座りなさい。」

………!!!!!!

教室に異様な空気が漂った。アヴィスは先生の指さした席に向かった。

「鈴のとなりだつてよ……。」 「かわいそ……。」 「あ
の子顔はいいんだけど……。」

（雛菊^{ひなぎく} 鈴^{りん}は通称、無笑の鈴とも言われてるやつだ。はっきり言
つて誰も近寄らない存在だ。）

アヴィスは席に着くと隣の鈴に声を掛けた。

「アヴィスです。よろしくおねがいしまーす!!」

ニコッ

アヴィスは満面の笑みで言った。

「………よろしく………」

さすがに無笑の鈴はその名の通り冷たく返事を返してきた。アヴィ
スは少し間を空けて、興奮しながらこう言った。

「かつこいいいいい………そのいいかた………！
！わたしにもおしえてっ!!」

「………え?………いいけど………」

鈴は少し照れくさそうに顔を赤くして言った。クラスのみんなが鈴
を見て驚いた。鈴がこんな表情を見せたのは初めてだったからだ。

「やったああー………!!にしてもその声なんか懐かしいなあ
………」

「……………よくお母さんに似てるとは言われるけど……………」

こうしてアヴィスと鈴の会話は続き、初めての友達がアヴィスにできたのだった。

第二話に続く……

第二話 出会い

こころこ 第二話 出会い

ある日曜日

(俺、永山 八志智はアヴィスとビスのいる生活と左眼のない生活に慣れてきてしまったのだった……。)

パクッ

「あー……!? それ俺様のカレー嘛だぞっ! 何勝手に食ってんだよっ!」

(ビスか……てか全部俺の買ったもんだろーがつ!)

「あ……も……何もやる気しねえ……。アヴィスに代わってやるよ……。」

ビスはふてくされてそう言った。

グルンツツツ!?

ビスは首を大きく回し、瞳を緑から黄色に変えた。

「わ……い!! コンビニいつてきたんだあ……。」

「あれ?……アンまんさんは……?」

「え?……買って来なかったけど……?」

「うそ……っ! なんてかかってこなかったの……っ!」
「っ! アンまんすきなヤシチしてるでしょ……っ!」

アヴィスは駄々をこねる子供のように怒った。

(いや、そんなの初耳だし……。)

「ヤシチのバカ……っ!」

そっうとアヴィスは家を飛び出した。

(……バカってアンまん買って来なかったくらいで……)

まあそのうち帰ってくるだろ．．．．）

「拾ってください。」

ダンボールにはそう書かれて空き地の奥の方に置かれていた。

「こんなところに．．．．捨て猫かな？悪い人もいるんだなあ．．．．。」

一人の少年がそのダンボールに近づいた。

「スウ．．．．スウ．．．．。」

「．．．．？．．．．寝息かな？．．．にしても大きいな．．．．犬かな．．．．？」

少年はダンボールを覗いた。

「！！！！．．．．人っ！！．．．．女の子っ！！」

その声が大きかったせいか、ダンボールで寝ていたアヴィスは目をこすりながら起きた。

「．．．．ここは？．．．．そか、ヤシチとケンカしちゃって．．．．ん？」

アヴィスは少年に気づき、じつと見た。

「きょうがつこうないのに、どしてそんなかつこうしてるのお？」

アヴィスは少年に寝ぼけまなこで問いかけた。

「え？．．．．あ！生徒会の仕事があつて学校に行ったからなんだけど．．．．。」

「あれ？びみょうにせいふくわたしのとちがう．．．．どして？」

少年はアヴィスにも色々聞きたかったが、される質問に答えることにした。

「制服って言うのは学校ごとに違うからじゃないかな．．．．？」

「そゝなんだあ．．．．てことはわたしとはちがうがつこうにいつてるんだあ！！」

「そおいうことかな．．．．えと．．．．どうして、ここに君は

寝てたの？」

「きみじゃないよお！アヴィスだよお！！」

「・・・・・・・・じゃあ、アヴィスは何でここにいたの？」

少年は少し首を傾けながら問いかけた。少し考えてアヴィスはなぜここにいるのか答えた。

「ヤシチとケンカしちゃったの・・・・で・・・・いえとびだしちゃったの・・・・。そしたらねむくなっちゃった・・・・。」

「・・・・・・・・ヤシチって？」

アヴィスは八志智に「天使のこと誰にも言うな」と言われたのを思い出し、言わないように説明することにした。

「・・・・・・・・えと・・・・・・・・しんせきつ！！」

「へえ・・・・・・・・親戚いるんだあ。」

「そお！！・・・・・・・・しんせきつ！！」

アヴィスはホッとして表情をゆるめた。

グウウ・・・・・・・・キユルルルウ・・・・・・・・

おながが鳴って、アヴィスは少し顔を赤くした。

「・・・・・・・・えと・・・・・・・・おなかすいちゃった。」

恥ずかしそうにアヴィスは言った。

「じゃあ、ちょっと食べに行こうか。」

「ほんとにいつ！やったあーーーー！！」

アヴィスは大喜びで少年に付いて行った。

「・・・・・・・・おいしい？」

おおはしゃぎで食べてるアヴィスに少年は問いかけた。

「うんっ！このハンバーガーっていうのおいしいっ！！ありがとう

お！・・・・・・・・えと・・・・・・・・なまえ・・・・・・・・？」

「あ！そういえばまだだったね。勇・・・・・・・・西園寺さいおんじ 勇いさむです。」

笑顔で勇は答えた。

「イサムだね！よろしくー！！」

アヴィスも笑顔で返した。

勇はアヴィスの笑顔を見ると少し顔を赤くした。

「ごちそうさまー！！」

アヴィスはそう言ってお辞儀をした。

「じゃあ、お家まで送っていくよ。」

勇はそういうと席を立った。

「……ムー……おうちにはまだかえりたくない！！」

アヴィスは少し不機嫌になった。

「……じゃあ、食後の散歩でもしよう。」

「わー！っ！それならするー！！」

アヴィスの機嫌が戻り、二人はお店を後にした。

二人は近くの公園のブランコで座っていた。するとアヴィスが話し始めた。

「……ヤシチにわるいことしちゃったかも……うん・

・しちゃった……どうしょお……。」

気が付くと、アヴィスは泣き出しそうになっていた。

「大丈夫だよ。謝ればきっと許してくれるよ。」

勇はアヴィスの目を見てやさしくそう言った。

「……ほんとにそうかな……？」

「そんなに悪い人なの？」

アヴィスは首を横に大きく振った。

「ヤシチはわるいひとなんかじゃないよお！！」

「なら大丈夫だよ。アヴィスもその人のこと信頼してるみたいだからね。」

「うん！！」

アヴィスは涙を拭き取りニッコリ笑った。

「……………お……………い。アヴィス……………」

八志智の声が遠くから聞こえた。アヴィスはその声が聞こえた方に言葉を返した。

「ここだよお……………!!」

アヴィスの声に気づいたのかヤシチの声がだんだん近づいてきた。

「じゃあ、わたしかえるね！またね、イサム……………!!」

そう言って手を横に振りながらアヴィスは八志智のどこまで駆けて行った。

「またね。」

勇は笑顔で返し、後姿を見せて帰っていった。するとアヴィスの顔が薄い朱色に染まった。

「ハア……………ハア……………どこまで行ってたんだ……………探したぞ……………ん？」

八志智は勇の方をじっと見た。

「……………ヤシチ?……………しってるひとだったの？」

「知らねえけどあの制服って超有名な私立校のじゃねえかつ！アヴィスどうやって知り合いになったんだよつ!!」

「……………え……………ふつうにだけど……………」

（ありえね……………!!てかこの女自体ふつ……………!!）

「あ！そういえばアヴィスの好きなアンまん買ったぞ。」

「ほんとにつ！やったああ……………!!」
バキュウ……………ンツツ……………!!

いきなり銃声があたりを包み込んだ。

アヴィスの足元には銃弾が地面にめり込んでいた。

「チツ．．．はずしたわね．．．天使の反応があつたと思つたらアヴィスだつたようね．．．」

空から黒いアゲハ蝶のような翼を持った金髪でツインテールの女の子が言つた。

「誰だあいつ!? てかなんで銃なんか持つて．．．?」

「あのこのなまえはエリーザ．．．おなじ天使なの．．．」

「じゃあ何で撃つてきたんだよ!」

「力をうばいにきたんだとおもう．．．天使どうしの力のうばいあいはフェニックスにもきよかされてるから．．．」

アヴィスは必死に八志智に説明した。

「なにごちゃごちゃ言つてんのよっ! さつさとその力もらつてよっ!」

銃を構え、エリーザは言つた。

バサッ!!

アヴィスは翼を広げ、式服に着替えた。

そして、持っていた十字架の鍵を大きくし、剣のように見立てた。

「そんなので私の攻撃を防げるわけ?．．．あんたの能力そんなじゃないでしょ?．．．私やるなら本気でやりたいの．．．」

「

エリーザはそういうと何かを待つかのように銃を下ろした。

「うう．．．わかつたよお．．．」

カシユウ．．．

アヴィスは十字架の鍵を銃のように変形させた。どうやらアヴィスは相手の武器をコピーできるらしい。

「そう．．．それでいいの．．．」

エリーザは満足気に銃を構えた。

バア．．．

バンッバンッバンッ

バキユウウ．．．

銃声があちこちに響き渡る。しかし聞こえている人間は八志智だけ

のようだ。

「アヴィス……そろそろ……もらうわっ!!!」

そういうとエリーザは銃の標準をアヴィスに絞った。

バアア……グルン……ン

「終わったわね……」

銃撃のせいかあたりにはすごい煙が立ちこもっていた。

「……!!!」

エリーザは煙の中からうつすら見える人影を見て驚いた。

「ビス、ただいま参上!!!」

ビスは変形する前の鍵を前に構えて銃弾をしのいでいた。

「ったく……戦うなら俺様にかわれよな!!!……」
じゃ、そろそろ再開するか……」

そういうとビスはどこから糸を取り出し、一瞬にしてエリーザの周りを覆った。

「俺様の能力、エリーザも知ってるよな!!!……糸で相手の動きを一定時間封じ込める……ってことでこっちはムシャクシャしてんだ攻撃させてもらうぜ!!!」

（ジャイ。ンみたいなこと言ってる……!! てか俺のことお構いなしで戦ってるし……!!）

八志智は少し離れたところで様子を見ていた。

グラッ……

ビスがエリーザに攻撃しようとしたとき体がふらついた。その瞬間にエリーザは逃げ出した。

「今日はこれまでにしといてあげるわ!! 次のときはこんなもんじゃないんだから!!!」

そういつてエリーザは空高く飛んで行った。

「くそっ!!! 逃しちまった……にしても左眼の調子悪かったなあ……慣れてねえせいかあ……?」

ビスはそう言うのと八志智の方に降りていき、翼をしまった。

「……腹減ったんだけど……ちゃんとカレーまんも買

第三話 目覚め

「こころ」 第3話 目覚め

ビスは呼吸を整えると八志智に下を向きながら話し出した。

「…………あの男、絶対家に入れるなよ！！あいつだけは…………ぜってー許さねえ…………。」

「あいつって何者なんだ？」

「あいつはおまえに会う前の契約者…………つまり元契約者だ。」

「じゃあなんでそんなに警戒してんだ？」

「あいつ…………俺様たちをただの人形だとは思ってない最低なやつだ！！もし…………アヴィスがあいつを見たら正気を失うかもな…………。」

グルンツツッ！！

ビスは首を大きく回し瞳を緑から黄色に変えた。

「はやくアンまんたべよー！！…………あれ？ヤシチどうしたの？…………」

アヴィスは八志智の顔を覗きながら不思議そうにして言った。

「…………なんでもない。早く食わないとアンまん冷めるぞ。」

そういうと八志智は玄関の鍵を閉め、自分の部屋に入っていた。

（…………にしてもあの男…………ほんとになんだったんだ？…………元契約者とか言ってたけどアヴィスになにしたんだろ…………？）

（翌朝）

「アヴィス…………学校行くぞ…………！！」

アヴィスの部屋のドアをノックしながら八志智は言った。
キィ・・・・・・・・

ドアが開き、アヴィスが出てきた。しかし、どうやら様子がおかしい。

「きょうなんかすぐくねむくてふらふらするの・・・・。」
いつもの笑顔が消え、少し辛そうな表情でアヴィスは言った。

「大丈夫か？今日は学校休め。ちゃんと寝てろよ。・・・あと鍵閉めるから誰が来ても開けるなよ。」

そう言い残すと八志智はアヴィスがベッドに入ったことを確認し、家の鍵をかけ、学校へ出かけた。

キンコンカーンコン

「やっと授業終わったよ・・・早く帰ってアヴィスの様子見てやらないと・・・・菊池には一応アヴィスのこと伝えだし、部活休んでもいいだろ・・・・。」

ダダダダダダッ・・・・

校舎に大音量の足音が響いた・・・・。

バシコンッ！！

八志智は後から頭を叩かれた。

「なっがやつまくーーーーん！なに一人で帰ろうとしてんのかなー
ーーーー！」

奈留率いる漫画研究部がやって来た。

「今日話しただろ！アヴィスが体調崩したって！！」

「だ・か・ら・今日の漫研の活動は、アヴィスちゃんのお見舞いに行くことに決まったのーーーー！！」

（勝手に決めてるしーーーー！！こっちの都合も考えろよっ
！！）

「・・・・ってことでレッツゴーーーーー！！！！」

奈留はそんなこと御構いなしに八志智の家に向かった。

家の手前まで着くと八志智はキョロキョロとあたりを見渡した。

「なにしてんの？・・・まさか！！なんかの覗き？！」

奈留は少し八志智を遠ざけた。

「ちげえよ！！昨日、元の契約者とかいうやつが家の前に立ってたんだよ！」

奈留は八志智と同じようにあたりを見渡した。

「・・・で、今日はいないみたいね。・・・つまんないのぉ・・・」

「なに言ってたんだよ！いなくてよかったんだよ！！・・・いいやつじゃないみたいだし・・・」

そついうと八志智はもう一度あたりを見渡した。すると、2階のアヴィスの部屋の窓が開いているのが見えた。

！！！！

八志智の脳裏に嫌な予感が浮かび上がった。

ダダダダダダッ・・・

いきなり八志智は走り出した。

「ちよつと！どうしたのよっ！！」

奈留たちは慌てて追いかけた。

2階のアヴィスの部屋に着くと八志智は愕然とした。

部屋は窓が開き、カーテンがひらひらとなびいていた。しかし、そこにはアヴィスの姿は見つからなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・アヴィスちゃんいないじゃない。どこいったのよ？」

奈留が部屋を見渡しながら言った。

ダダダダダダッ・・・

いきなり八志智は部屋を飛び出し、家を出て行った。

「……の……く……い……い……」

奈留の問いにも答えず、八志智はただ探しに走ったのだった。

「お——い、アヴィス——どこだ——」

そう叫びながら町内を駆けた。しかし、どこからも返事が返つてくるようすはなかった。

八志智が探し回って2、3時間はたっただろうか。八志智は公園にいた。静まり返った公園にぼつんと独りでいた。

誰かが走ってきた。奈留だった。走り疲れていたようだった。

「ハア……ハア……ケータイも持っていないかずに家飛び出すんだから……探したわよ……ハア……ハア……」

「
・
・
・
・
なんのようだよ。
」

八志智は少し奈留に八つ当たった。

「かわいくないなあ……せっかくアヴィスの情報手に入れたのに。」

「……ほ……ほんとかな?！」

「嘘言ってどうすんのよ！ほんとよ、ほんと！ちよつとついて来なさい。」

八志智はそう言われると奈留について行った。

連れて行かれた場所には大きくて立派な家があった。

「誰の家？」

八志智は指をさしながら尋ねた。

「柳葉君の家よ。彼、お金持ちなのよ！知らなかったあ？」

（知るか——！！てかあのオタク君こんなとこ住んでたのかよっ！！見かけによらねえな。）

ピンポーン

「菊池 奈留でーす！」

ベルを鳴らし、奈留がそういうと家の門が開いた。広い庭を通り、家の前まで来ると女の人がドアを開けてくれた。どうやら本物のメイドのようだ。いかにもメイドのような服を着ている。

（・・・このメイドさんの服、オタク君の趣味か？少し高そうな生地を使ってるな・・・）

メイドさんに案内されながら八志智は思った。
コンコンコンッ

「菊池様をお連れしました。」

メイドさんはドアをノックしてそう言った。

「入って来てもらってください。」

部屋の中から八志智いわくオタク君の返事がした。

カチャッ

ドアをメイドさんが開けると三夫と奈留の秘書の未来が待っていた。

「お茶はいらないからもうさがって良いですよ。」

三夫にそういわれるとメイドさんはお辞儀をして部屋を出て行った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

八志智はキョロキョロとあたりを何回も見渡した。

「落ち着きなさいよ！っていうかアヴィスちゃんのことで来たんでしょ！！」

奈留は何度か来たことがあるのか、冷静だった。

「さつき見つけたんですけどここのサイトに・・・・。」

・・・・・・・・！！！！

部屋の中に衝撃が走った。なぜならモニターには、手足を縛られ、ゴスロリなどの服を着せられたアヴィスの画像が何枚も出てきたからだ。

「これ・・・アヴィスちゃん・・・・・・・・・・よね・・・・・・・・・・・・・
・・・？」

奈留が八志智に確認した。

「……………たぶん。これ出してるやつどこに住んでるとか分かんねえのか?!」

八志智は驚きを少し隠しながら言った。

「……………すいません。分からないんです。分かっていることは……………ケージェイアイKJIという人物がこのサイトの創始者ってことだけです。」

未来が気まずそうに答えた。

「どうすればいいんだよ……………」

沈黙が当分の間続いた。

カシャカシャツカシャツ

誰かアヴィスを写真に撮っている。どうやら未来が話していたKJIという男らしい。アヴィスは薬で眠らされているのか身動きひとつない。そして、KJIは撮り終わると違う衣装にアヴィスを着替えさせ、また写真を撮り始めた。

カシャカシャツ

「いいねえ!でももつとインパクトが僕としてはほしいなあ……………」

・そうだ!」

すると、アヴィスの衣装を脱がせ、鎖を身体に巻きつけた。

「これでいい。」

そういうとまた写真を撮り始めた。

その頃、まだ三夫の部屋には沈黙が続いていた。

八志智はふと窓を見ると、黒い飛んでいるものが見えた。カラスだろうか?しかし金色の髪の毛がある。目を凝らして見ると昨日襲って来た天使のエリーザだった。

(……………!!)そういえばあいつ天使の反応がどうとかって言ってたな……………。ってことはあいつアヴィスのい

ると分かるんじゃないか？)

もう一度八志智は窓を見た。すると、エリーザが見えなくなっていた。

(しまった！早く追わねえと！)

八志智は慌てて部屋を飛び出した。

「待って！どこ行くのよー？」

奈留たちも必死に後を追った。

外に出ると、エリーザが遠くを飛んでいるのが見えた。その方向に八志智はものすごいスピードで駆けて行った。

「ねえ！なにを追ってるのよー！？」

奈留が八志智に追いつき言った。

「あの黒くて金髪のやつだよ！見えるだろ！！」

八志智が答えた。

「そんなの見えないわよー？幻覚でも見てるんじゃないのあ？？」

(・・・そうか！！こいつら天使見えないんだっけ！)

八志智は少し考え直した。

「天使だからおまえらには見えねえけど、あいつに聞けばアヴィスの居場所がわかるはずだ！」

そのとき、こちらの気配に気づいたのかエリーザがこちらを向いた。そして八志智を見つけると、降りながら向かって来た。

「あたしのストーカーしてなんのつもりなわけ？すごいムカつくんだけど！！」

腰に手をやり、不機嫌な顔をしながらエリーザは言った。

「別にストーカーしてたわけじゃないが・・・・・・おまえ・・・

・・・アヴィスの居場所知ってるか？」

するとエリーザは後ろの奈留たちをちらつと見ると羽を収めた。

・・・！！

奈留たちは驚きを隠せないようだった。そして三夫は、アヴィスの

ときと同じようにケータイのカメラでエリーザを撮りまくるのであった。

ボコッ！！！！

エリーザが撮りまくっている三夫に拳骨をくりだした。

「なんなのよ！この気色悪いやつは！！！！！！てゆーか、なんであたしにアヴィスの居場所を聞くわけ？・・・・まさか！逃げたわけ？？」

エリーザは笑い気味で八志智に聞いた。

「逃げたんじゃねえよ！ちよつと分かんなくなっただけだ！！で、結局居場所分かんのか？」

「フンッ・・・・そんなの分かるに決まってんじゃない！教えるわけないけど！」

腕を組み、少し偉そうにエリーザは答えた。

ガッ

「さつさと教えろ！！！」

エリーザの首元を掴み、八志智は真剣な眼差しで言った。

カシヤカシヤカシヤッ

一方、アヴィスは相変わらず鎖を巻かれたままKJに写真を撮られていた。

「うーん・・・・やっぱ何かが足りないな・・・・そうだ！血だ！！きつと鎖との相性はばつちりのはずだ。ちよつと持つてくるから待つてね。僕のドール・・・・」

そついうとKJは包丁を台所にとりに行った。

ダダダダダダダッ

「ほんとにこつちであつてんのかよ？！」

八志智は走りながらエリーザに聞いた。

「失礼ね！！あたしが信じれないわけ？それなら帰ってもいいのよ？！」

エリーザは怒りながら言った。どうやら素直に案内しているようだ。「にしても・・・まだ着かないのお？」

奈留は疲れてきたみたいだ。走るのが遅くなってきたている。

「まだ10分と走ってないのにダメな女ねえ。あともう少しだからがんばりなさいよ！！」

そうエリーザに言われると奈留の足が少しだけ速まった。

「ただいまあ。」

KJIが包丁を持ってアヴィスのもとへ帰ってきた。

「さて、どこから血を調達しようかあ。やっぱ手首かな？結構たくさん出そうだし・・・。」

そういうとアヴィスの手を掴んだ。

シュツ

迷いなくアヴィスの手首を切ると、血を身体のいろんなところになすりつけた。

「・・・・・・・・まだ何か足りないなあ・・・・・・・・そうだ！血の涙でも流してもらおうか・・・・・・・・。」

そういうと、先程の血のついた包丁を手にとった。KJIは、包丁の鋭い方を下に向け、アヴィスの顔を上に向けた。強引に開けたアヴィスの瞳に血を落とすようだ。

ピチャ・・・・・・・・ン・・・・・・・・..
バツ

左目に血が落ちた一瞬のできごとだった。いきなり鎖がKJIを襲い、動けないようにした。

「なっなにがどうなったんだ？」

驚いたのか、KJIからは大量の汗が噴き出している。

「御主も運が悪いやつだなあ・・・・いや、わらわに会えたのだ

から運がいいのかもしれないあ．．．クククツ．．．」

眠っているはずのアヴィスが身体は立ち上がった。左眼はまるで血ように紅く染まっていた。そして、もう一方の眼の右眼は左手で覆っている。

「．．．にしても、鎖はわらわの配下だぞ．．．．．それも知らずに巻きつかせるなんていい度胸だな．．．クククツ．．．」

鎖はどんどんKJIの首に巻きついていく。

「．．．にしても．．．よくもこのわらわの身体を傷つけてくれたな．．．どうしてくれようか．．．」

KJIは少し息苦しそうにしている。

「そうだ．．．．．死ね」

ガツ！！

そういうと一気に鎖が首を強く締め付けた。KJIの意識がなくなってきた。

「なんだ．．．そなた．．．意外にもろかったのだな．．．．．クククツ．．．．．！！」

ジャラ．．．．．ン！！

いきなり鎖の締め付ける力が消えた。

「くっ！．．．．．まだこの身体に慣れてないから力が．．．．．まあい！次を目覚めたときはありとあらゆるものを破壊してやる．．．．．」

そういうと次第に左眼の色が紅から黄色に変わっていった。

ゆら．．．り ゆら．．．り

アヴィスの身体は今にも倒れそうだ。

「あぶない！！」

いきなり八志智が部屋に入ってきて倒れかけたアヴィスを抱き留めた。アヴィスは眠っているらしい。

「あゝあ、こんなにぶちまけちゃって．．．」

エリーザに言われて八志智はあたりを見渡した。すると、壁や床、

天井にまで血が付いていた。しかも近くにおいてある家具やカメラ、全てが何かに叩きつけられたように壊れていた。

「こ・・・これって全部アヴィスが・・・?」

八志智は不安な表情でアヴィスの顔を見た。何事も無かったかのような寝顔だ。

「そつそんなことより警察を!!」

奈留が慌ててケータイから通報した。

（数分後に警察が来た。KJIはその場で逮捕され、俺らは事情をくどいくらいに聞かれている。そして、アヴィスは簡単な治療を受けている。よかった、そこまで大怪我じゃないみたいだ。そういえば、エリーザは警察が来る前にさっさと帰っていつてしまった。面倒事は避けたいらしい。）

「それじゃあ、今日はもう遅いし帰っていいぞ。」

警官にそう言われて、寝ているアヴィスを担いで八志智たちはその場を後にした。

奈留たちと別れ、八志智は家に着くとアヴィスをベッドに寝かせた。明日は学校を休もうと考えながら、今日のことを考えていた。

（俺たちが着いた時、KJIとかいう男は意識がなかったのはどうしてだろう? 血が天井にまで付いたのはなんでだろう?）

などの事を考えながら八志智の心には大きな不安が残るのであった。

第四話に続く・・・

第四話 花火の夜に

こころこ 第四話 花火の夜に

— — — — — 〰 〰 〰 〰 〰 — — — — —

「ほにゃららなわけで、ほにゃららですから、ほにゃららなわけです。」

（この夏休みの過ごし方とか言う校長のありがたーい解説を聞くと待ちに待った夏休みなわけだが、かれこれ二、三十分くらいぶつ続けで話して校長に「暇なんですか」と問いたくなるのは俺だけではないだろう。しかし、あの事件以来にもなく、アヴィスもいつも通りのほほんとしている。はつきり言つて平和そのものだ。）

「……ではこれくらいで校長からのお話を終わります。」

「おっ！ やつと終わったらしい。これでやつと夏休みが……」

（来ねええええー！……この一言が一言じゃなく、一二十分にもなんだよなあ……ハア……。）

ため息を吐きながらも八志智はただひたすらと夏休みを待つのだ
た。

ぢわぢわぢわぢわぢわ . . .

「やっと終わったあ……アヴィス、さっさとかえるぞ。」

教室で帰りの支度を済ませ、アヴィスの机の近くまで行き、だるそうに八志智は言った。

「りよおーかい。」

八志智とは反対にアヴィスは元氣良く返事をした。

ダダダダダダダッ！！！！

ガシイッ！！

「アーーーーヴィッスちゃーーーーん！着物は萌え要素よーーーー
ーーーー！！」

奈留がアヴィスを後ろから抱きながら、顔を頬擦りして言った。い
つも通りのハイテンションだ。

「・・・・・・言ってる意味が分かんねえんだけど・・・・？」

八志智が苦笑いで言った。

「今週の土曜日に神社でお祭りがあるの！もちろん打ち上げ花火
付き！！だから、アヴィスと永山君を誘ってんの！状況理解できた
？」

（誘ってたのか！！とてもそういう状況には見えなかったんだが・
・・・・）

スッ・・・・・・

鈴が帰りの支度を済ませ、席を立った。

「・・・・・・さよなら。」

（いつも通りの冷たい言い方だ。でも挨拶をするようになったた
けでも進歩である。）

ガシッ！

？

「ちよおおつと待ったああああ！！」

奈留が鈴のスカートを掴んだ。鈴は状況が理解できないような、迷
惑がっているような、むしろ無表情のような顔をした。

「・・・・・・分かりました。待ちます。」

（なんじゃそりやあーーーー！！答え方明らかにおかしいだろ！い
や、合ってはいるのだが、何かが違うぞ！絶対違うぞ！！）

八志智はつつこみたい気持ちを必死にこらえた。

「実はずーーーーっと思ってたんだけど・・・・あなた・・・・
・・・・」

奈留は深刻そうな表情で鈴を見た。

（一体何なんだ？言いにくいことなのか??）

「はつきり言って……」

（ハッ！……もしや菊池は雛菊にケンカを売ろうとしているのか？！止めなければ！！）

「あ、あのさ、その話は後に……。」

ギラッ！

「永山君は黙ってて……。」

奈留はすごい剣幕で八志智を睨んだ。

（ヒイツ！いつもの菊池じゃねえ！！）

「改めて言わせてもらうけど、あなたって……。」

ゴクリッ

八志智は唾を飲んで耳を傾けた。

「萌えキャラじゃない？？」

……

周りが一気に氷ついたかのように沈黙が漂った。

「沈黙、冷静、秀才OK！髪の色、赤、OK！体格、OK！
奈留がいきなり指差し確認し始めた。

「うん、やっぱりあなた萌えキャラだわ！！」

左手を腰にやり、満足気に奈留は言った。

「アヴィスちゃんと仲良いみたいだし、アヴィスちゃんの友達
あたしの友達！！ってことで、あなたもお祭り来ない？」

奈留はスマイルで言った。

「……いいですけど、その前にスカート放してくれ
ませんか？」

よく見ると奈留はまだ右手でスカート掴んだままだった。

「……あははっ私ったらおませさん！」
パサッ……

奈留はスカートをやっと開放した。

「で、何時にどこへ行けばいいんですか？」

鈴は常に冷静だ。

「んじゃ、土曜日、神社の入り口で6時集合ね！あ、アヴィスち

やんと永山君は着物貸してあげるから私ん家に5時に着てね！んじや、今日私忙しいからバイバーイ！！」

奈留は相手の都合も聞かず押し付け、帰って行ってしまった。

「バイバーイ！！」

アヴィスだけが大きく手を振った。

「まだ行くとも言っていないだが……。」

八志智はあきれて独り言を言った。

～土曜日～

八志智とアヴィスは言われたとおり奈留の家に向かった。

ピンポン♪

「ハロー！」

チャイムを鳴らすと奈留の声がした。

ガチャツ

「待ってたのよお！さ、入って入って！」

リビングに着くと三夫と未来がいた。どうやら漫研全員お祭りに誘われたらしい。

「部屋に行つて浴衣取つてくるねえ！」

奈留が部屋を出て行った。

ダダダダダダッ

「取つてきたヨー！！」

（早ッ！！つかそのYO - はなんだ？そのYO - は?!）

「じゃーん！見て見て、我が漫研部員全員の浴衣を私が作つたのよお！！カツウイでしょお！」

「おお！……えっ？……」

みんなが驚いたかと思うと次の瞬間、異様な空気が漂った。

「……まさかこの赤、青、緑、黄色、ピンクって……レンジャーもの意識してないか……？」

八志智が苦笑いで聞いた。

「あら、さすが永山君ね！その通りよ！ちなみに私がレッド！！部長だからね！！フッフッフ・・・。んで、もちろんアヴィスちゃんピンク！！うちのマスコットキャラだからね！」

「アヴィスピンクだぁー！！！！」

アヴィスはすごく喜んでいる。

「そして、未来ちゃんはブルー！！頭良さそうだし、私の秘書だからね！！」

（・・・良さそうだしって・・・。）

未来は心の中でつつこんだ。

「柳葉君はイエロー！！なんか将来、太りそうだから！！」

「それはヒドイですよぉ・・・。」

少し泣きそうになりながら三夫は言った。

「あははっ！気にするな！最後に永山君がグリーン！！この色しが残ってなかったから・・・。」

「余りかよ！！」

八志智が激しくつつこんだ。

「じゃあ男子はここで着付けてて、女子は私の部屋で着付けるから。」

そういうと奈留たちは部屋を出て行った。

「ジャジャーーン！！着付け終了しましたぁ！！やっぱアヴィスちゃんはピンクよねえ！」

奈留が目を輝かせながら言った。

「でも、なんでアヴィスだけ金魚柄なんだ？他のみんなは柄なんてないのに・・・？」

八志智が不思議そうに言った。

「・・・そりゃあ、キャラ的にでしょ！！」

「・・・」

奈留が冷静に言った。そのせいか、みんな静まり返ってしまった。

「コホンツ・・・そんなことより、お祭りにレッツゴー！！！」
奈留は右手を高く突き上げた。

「そういえば、リンのゆかた、なにいろかな？」

祭りに向かう途中、アヴィスが言った。

「そりゃあ、白か黒かシルバーに決まってるでしょ！」

奈留が自信満々で言った。

「白と黒は着てそうだけど、なんでシルバー？」

八志智が根拠を聞いた。

「ばつかねえ、レンジャーものの6人目といえば白、黒、シルバ
ーと相場が決まってんのよ！ちなみに私はシルバーが好き！！」

「・・・聞いた自分が馬鹿だった・・・。」

八志智が奈留の馬鹿さ加減を再確認した。

「あ！・・・リンだあ！！」

アヴィスが神社の入り口に向かって手を振った。

「えっ！どこ？白、黒、それともシルバー？！」

奈留は目を凝らして入り口の方を見た。

紫！！

ダンッダンッダンッ・・・

奈留が拳を地面に叩きつけ、悔しがっている。

「あの、どうかしましたか？」

鈴が状況を把握しきれなかったらしい。当たり前だが。

「ううん、なんでもないよ。」

アヴィスが苦笑いで答えた。

「わあっ！すっごーーい！！」

アヴィスが夜店を見て興奮している。

「まあ、一応レンジャーに紫はいるわ！ここはポジティブに考えましようっ！！」

まだ奈留はレンジャーにこだわっているようだ。

「まだ花火まで時間あるし、遊ぼうぜ！」

八志智がケータイの時計を確認しながら言った。

グルンツツ！？

「うおっしゃー！！金魚すくいやりにいくぞ！！」

ダダダダダダッ・・・

ビスが勢いよく走り出した。

「ちよつと待ってよう！」

奈留たちは追いかけた。

「八志智ー、金払っとけー！！」

金魚すくいをもう始めようとしている。

「このでつかいのとってやる！！でいやー！！」

バリッ・・・ポチャッ

一瞬にしてポイの和紙が破けた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

沈黙が漂った。

「うーし！次は射的だー！！」

ごまかすようにビスは射的屋に走っていった。

「ちよっ・・・お前待てよー！！」

八志智はお金を払い、また追いかけていった。

「そろそろ、いっぱい遊んだし、いっぱい食ったし、花火を待つか、あと30分ぐらいで始まるし。そいえば場所とりしてないけど大丈夫か？」

八志智が不安そうに言った。

「大丈夫ですよ、僕のメイドが特等席をとってありますから。」

三夫が冷静に言った。

「んじゃあ、問題ないな。…………あれ?…………」
キヨロキヨロ…………

八志智が辺りを見渡した。

「どかした?」

奈留が八志智に心配そうに言った。

「アヴィスが…………居ねえ!!おまえら先に行ってる、アヴィス連れてくるから!なんかあったら俺、ケータイ持ってるし!!」
そういうと八志智は駆けて行った。

「ちよつと待ち…………もう遅いか。しゃーない!私らは大人しく待つとくか。」

奈留たちは場所とりしてある方に歩き始めた。

「ふわぁーん!!おめんみてたらみんなとはぐれちゃったよー…………!」

アヴィスは泣きながら八志智とは違う方向に進んでいた。

バキュウウ…………ン

「やーつと見つけた。こんなとこにいたのね。」

銃声と共にエリーザが夜空に姿を現した。どうやら銃声は周りの人には聞こえないらしい。

「…………さすがにあたしも祭りに来た人にまで傷つけたくはないから遠くでやらない?」

エリーザは銃を下ろした。

バサツツ…………グンツツツ!?

「上等だ…………この馬鹿野郎…………」

アヴィスは翼を広げ、式服に着替え、ビスに変わった。

「それじゃあ、人気がないところに行くわよ!」

エリーザは明かりの少ない人気のないところに向かって行った。そしてそれをビスは追いかけて行った。

「そろそろこの辺でいいでしょ。さっさとその力……もらうわよ!」

いきなりエリーザはビスの方を向くと襲い掛かって来た。

バキユウン……

「おわっ!……あつぶねえ!」

なんとか襲って来た銃弾をビスは避けると十字架の鍵を大きくし、剣に見立てた。

シャキィ……ン

今度はビスがエリーザに鍵を振りかざし、攻撃した。しかし、エリーザは銃を両手で持ち、攻撃を防いでいる。

シュツ…… バッ!!

エリーザの両手が使えないことを確認し、ビスはエリーザの脚目掛け、キックをした。ところが、エリーザは銃で鍵をなぎ払い、後ろに引き、避けた。

「なかなかやるじゃない。」

エリーザが少し距離を置いて言った。

「おまえもな。」

ビスが返した。

「この攻撃ならどうかしら!!」

バンッ

エリーザが銃を構え、一発放った。

「そんなの簡単に避けて……!!」

ビシャッ

銃弾はビスの右足首らへんをかすった。といっても血は少ししか出ていない。しかし、今までエリーザの攻撃があつたことないビスにとっては何が起ったのか一瞬分からなかった。

「あんた……何かあつたの?」

撃ったエリーザもあつたのが信じられないというような顔をし

ている。

「うつせえ！ただ足が滑っただけだ！！」

ビスは強気で言った。

「足って・・・空飛んでのに滑ったも何もないじゃない。」

確かに二人は地上高く飛んでいて、ぶつかるものさえない。

（・・・あのKJIの事件からだ。たまに左眼が一瞬見えなくなる。くそっ！あの時にながあったんだ・・・？）

アヴィスは事件のことを必死で思い出そうとしていた。

「今日はなんか張り合いがないからもう帰るわ。」

エリーザは不機嫌な顔をして帰っていった。

「・・・俺たちも神社に帰るか・・・って神社どこだ？！」

どうやら神社の方角が分からなくなってしまうたらしい。

「くそ！ここにいてもしょうがないし一応進むか。」

ビスは勘を信じ、羽ばたき出した。

「くそ！さっさとしないと花火終わっちゃうぞ！・・・ん？やべー！足から血が出てきやがった。さっきまで少ししか出てなかったのに・・・」

ビスは地上に降りて右足の様子を見ることにした。

スタツ

「痛っ！」

地面に右足をつけると痛みが走った。

「そこまでの傷じゃねえけどやっぱいてえな・・・って言っても戦ったり、飛び回ったりして翼も疲れちまったしなあ・・・引きずって歩くか・・・」

ビスはそう言っていると右足を引こずりながら歩き始めた。

「あゝあ・・・もう間に合わないかもな。花火始まってんのかな？・・・勝負なんかしなきゃよかったな。・・・後でアヴィスに謝らねえとな・・・」

独り言をつぶやきながらビスは必死で歩いていた。

カランコロンカランコロン・・・

誰かが近づいてくる下駄の音がした。

「やべっ！人來ちまった。一応、アヴィスに変わっとくか。」

グルンツツツ！？

「・・・ここは？・・・そかエリーザがきてビスにかわったんだ。いたっ！！みぎあし、けがしてる。どうしたんだろ？」

アヴィスは状況が理解できていないらしい。

ドンツ！！！！

「うわっ！！」

アヴィスに誰かがぶつかった。

「ごめんなさい、大丈夫ですか？」

ぶつかった相手が心配している。

「だ、だいじょぶ。」

アヴィスがぶつかった相手を見上げた。

「あれ？イサムだ！！」

「え？あ！アヴィスだったんだ！！・・・あれ？・・・右足から血出てるじゃないか！」

「えと・・・これはっ・・・そ！そう！！ころんだの！！」

アヴィスは必死にごまかしている。

「動かないで！！」

そういうと勇は浴衣からハンカチを取り出し、アヴィスの右足に巻いた。

ポフンツツツ！！

アヴィスの顔が真っ赤になっている。

「これで止血出来ると思うけど、出来なかったらすぐに病院に行くんだよ。・・・顔、赤いけど大丈夫？？」

「へ、へ、へへ、へいきだよお！！」

舌が回っていない。

「・・・浴衣ってことは花火見に行くの？それとも、もう帰っ

ちやうのかな？」

「みにいきたいけど・・・。」

アヴィスはチラツと右足を見た。

「見に行きたいんだったら僕がおぶって連れて行ってあげるよ！」
勇は微笑みながら言った。

「で、でもそんなことしたらイサムまではなびまにあわなくなっちゃうよ！」

アヴィスがそう言うのと勇は優しく笑った。

「だいじょうぶだよ。それに花火は一発だけじゃないんだ。一発目の花火に間に合わなくても、最後の一発までに間に合えばバいいんだから。」

勇はそう言うのと、アヴィスが乗りやすいようにしゃがんだ。

「ありがとー！」

勇はアヴィスをおぶって神社の方へ歩き出した。

ヒュルルルウ・・・バアーン

花火が始まっているようだ。

「くそっ！アヴィスのやつどこいったんだ？神社のどこ搜してもいなかったし・・・。」

八志智が奈留たちと合流して言った。

「一人で帰っちゃったとか？」

奈留がそう言うのと八志智は真剣に悩んだ。

「・・・その可能性もなくはないよな。・・・一応、家に帰ってくる！」

八志智は走り出そうとした。

「ちよつと待ったー！」

奈留が慌てて八志智が帰るのを止めた。

「・・・アヴィスちゃんあそこにいるよ。」

奈留が立ち見客の方を指差した。

「へ？」

指差した方を八志智は目で追った。すると、アヴィスがいた。そして、その隣には勇がいた。どうやら話をしながら花火を見ているらしい。

「あの人、知ってる人？」

奈留が問いかけた。

「ああ・・・この前の私立校の・・・アヴィスはイサムとか呼んでたっけ？・・・」

八志智の顔がふてぶてしくなった。

祭りの様子を遠くから眺める少年がいた。

「今日は祭りか・・・捜しにくいな。けどこの町にいるのは間違いない。・・・フェニックス。」

第五話に続く・・・

第五話 課題

こころこ 第五話 宿題

「夏だ！蝉だ！蝉取りだ！！ってことで蝉取りに行こうぜ！！」
ビスははしゃぎ回っている。

「外に出かけてる場合じゃねえだろ。」

八志智は冷静に言った。

「んじゃ、何すりゃいいんだ？・・・ん？」

ビスがガラス戸から外を見た。外には引越し用のトラックが止まっていた。

「ああ・・・今日、隣のアパートに越してくる人がいるらしい。」

八志智がチラッと外を見た。

「ふーん・・・おまえ挨拶に行かなくていいのか？それとも俺様が行こうか？」

ビスはどうしても出かけたいようだ。

「相手から挨拶に来るだろ。それに引越し早々に行く迷惑だろ。・・・それより、おまえ・・・夏休みの課題どれくらいやったんだ？学校始まるまであと一週間もないぞ。」

「・・・。。。。。。さて、部屋にでも行こうかな。」

ガシッ

「ごまかすな。」

八志智がビスの服を掴み、部屋に向かうのを阻止した。

「・・・英語はアヴィスが得意だからやったし、数学は俺様が大得意だから終わったんだ・・・世界史のレポートもやったし、音楽の課題も終わったし・・・あと理科と古典と地理ぐらいかな？」
ビスが悩みながら答えた。

「理科と古典と地理って一番問題数多いやつじゃないか！おまえ

そんなんじや課題終わんねえぞ。」

八志智が呆れ返っている。

ピロピロロロ

八志智の携帯電話が鳴っている。奈留からの着信だ。

「なんだ？・・・勉強会？・・・まあいいけど、菊池ん家行けばいいんだな。分かりやした。んじや・・・。」

八志智は電話を済ませるとビスの方を向いた。

「菊池が家で勉強会を開くんだと・・・だから俺たちも来いつてさ。支度してさっさと行くぞ！」

そう言つと八志智はさっきまでやっていた課題のプリント等をリュックに入れた。

「奈留ん家かあ・・・あいつ、いつもハイテンションだから精神的に疲れんだよなあ・・・ハア・・・。」

ビスがため息をついている。

「課題をやるいい機会だろ？！いいからさっさと支度しろ！！」
ビスはぶつくさ言いながら支度をした。

ピンポーン　　ガチャッ

「オッハヨ・・・！！」

チャイムを鳴らすといつもながらのハイテンションで奈留がドアを開けた。

「さあ、入った入った！時間ないんだから！」

奈留はすごい慌てている。

リビングに入ると机にたくさんの課題の問題集とプリントが並んでいた。

「あれ？漫研の小井川さんとオタク君は？」

八志智が部屋を見渡しながら言った。

「ああ・・・今日は一年生抜きの勉強会なの！・・・だって・・・さすがに先輩が課題を全然やってないとか見せちゃいけないでしょ

「!!」

「……………」

周りの雲行きが怪しくなってきた。

「……まさか菊池、課題マジで全然やってねえとか言うんじゃないだろなあ……?」

八志智が眉毛をピクピク動かしながら苦笑いをしている。

「まつさかあ!!……ただ英語と数学と世界史と理科と古典と地理をやってないただだよあ!!」

奈留がへらへらと笑って言った。

「全部じゃねえか!!!!」

八志智がすごい恐い顔で奈留を見た。

「違うよ! 芸術の課題は終わってるもの。だから全部じゃないよ!!」

奈留がくだらないツツコミを入れた。

「そんなのどーでもいい!! 俺は写させてやんないからな!!」
すると、奈留が怪しい笑みをした。

「フッフッフ……私も永山君を当てにはしてないわ。ってことでは我が高校の成績トップナンバーONEの鈴ちゃんに来てもらったわ!」

カチャッ

すると、鈴が部屋に入ってきた。いつも通りの無表情だ。

「じゃあ、早速教えてもらいながら勉強会を始めYO……!!」

かきかきかきかき けしけし カチカチカチカチ……
し……………ん

みんな黙々と課題をしている。そのせいか、部屋にはシャー芯の擦れていく音と出す音、消しゴムを使う音しか聞こえない。

「ね、ねえ、おやつでも食べない?」

その静けさに耐え切れなかったのか、奈留が言いづらそうに言った。

「課題やってから食べる。」

「甘いものは嫌いだ。」

「お構いなく。」

八志智、ビス、鈴が順番に断った。

し~~~~~ん

またもや部屋には静けさが漂った。

カクカク・・・ガクンッ

ビスは眠いのか、首が前に倒れたり、後ろに倒れたりしている。

（ねみい・・・そうだ！！こんなことはアヴィスに任せよ・・・
・・・アヴィスの反応がねえ！！あいつも寝てんのか？！・・・ねむ・・・つか寝ててもバレねえだろ・・・寝ちゃお。」

ビスはとうとう眠ってしまった。

（ふあ~~~~。よく寝た。にしても変な夢見たな・・・コンビニでカレーまん頼んでのに角煮まんが出てくんだよ。マジわけ分かんなかったな・・・あの夢・・・あれ？俺様古典なんてやったっけ？いや、やった覚えねえし、八志智はぜってえこーいうのやってくれねえから鈴がやってくれたのか？？）

ビスがちらりと鈴の方を見た。

「・・・。」

鈴はいつも通り冷静に予習をやっている。

（まあ何はともあれ課題が済んだんだしいいか・・・。）

「うお~~~~~しっ！！課題おっわり~~~~~」

「~~~~~ってことでお祝いにケンタヘレッツゴー~~~~~」

奈留が拳を突き上げながら叫んだ。

「ゴー~~~~~！！」

ビスもつられて言った。

「帰りたいんだが・・・。」

八志智がそう言うと奈留とビスは八志智を引きずりながらケンタマで連れて行くのだった。

第六話に続く・・・

第六話 転入生

こころこ 第六話 転入生

「おい、アヴィス行くぞー。」

玄関で八志智が靴を履いている。今日から学校は二学期になるのだ。

「ちよつとまってよお。……そういえば、このまえこしてきたひとみたことないけどどんなひとかしってる？」

アヴィスが不思議そうに八志智に聞いた。

「俺も見たことないんだよなあ……引越しの荷物がまだ片付いてねえのかな？……つか、そんなことよりさっさと学校行くぞ！」

八志智はアヴィスを急がせた。

「ちよ、ちよつとまってよお。」

アヴィスは慌てて靴を履いた。

キンコンカンコン

「なんとか間に合ったけど、まだ先生来ねえな。なんかあったのか？」

八志智は独り言を言っている。

「知らないの？なんかまた転入生が来るらしいよ！今度はツンデレ系のキャラがいいなあ！！」

八志智の独り言が奈留まで聞こえたらしい。

ガラガラッ

ドアを開けて先生が入って来た。

「みんな、席に着けよお。」

先生がみんなに促した。するとみんなは言われたとおりに席に着い

た。

「これから転入生を紹介するぞっ！！・・・入ってきなさい。」
ガラガラッ スタスタスタ・・・

ドアを開いて出てきたのは茶髪の美少年だった。

「じゃあ、自己紹介を頼むよ。」

先生が言った。

「如月 宗助きんづき そうすけと言います。よろしく。」

宗助は軽く頭を下げた。

「じゃあ、席はアヴィスの後でいいな。」

先生が指で指しながら言い、指示通りに宗助は席に向かった。

ガラ・・・

椅子を引いて席に座るとアヴィスが宗助を見た。

「わたし、アヴィス。よろしくね。・・・ボソッ・・・」

アヴィスは小声で挨拶した。

「あつそ！」

宗助は何故かそつばを向いた。

「・・・？」

アヴィスはちよつと困った顔をしながら、黒板の方に顔を戻した。

「昼食ターーーーイム！！」

奈留が先生が部屋を出て行ったと同時に叫んだ。

「んじゃあ、今日は鈴ちゃんもお弁当忘れたから、みんなで学食を食べに行こー！ー！ー！ー！ー！」

奈留が張り切りながら鈴とアヴィスの背中を押している。そして、その後に八志智がついてきている。

「あ！！そっいえばソースケもくる？」

アヴィスは宗助の方を向いて聞いた。

「俺は弁当持ってきてる。」

宗助は不機嫌なのか少し怒り気味で言った。

「早く行かないと時間の無駄遣いだ。行こう、アヴィス。」

鈴が急ぎ足で教室を出た。

「あ、まってえ〜！」

アヴィスは走って追いかけた。

「バクバク・・・やっぱりあの子、ツン系だね!!」

奈留が天井を食べながらわけの分らないことを言っている。

「ズル、ズル・・・てか、なんであんなに不機嫌なんだ？」

ラーメンを食べながら八志智が不思議そうに言った。

「ズズ・・・どちらかというと永山さん、つまりアヴィスさんがお話をする度に不機嫌になっていっているような気がします・・・。」
鈴が食後の熱いお茶をすすりながら言った。

「アヴィス、おまえ何かしたのか？」

八志智が疑った目で見ている。

「アヴィスはなににもしてないよぉ！」

アヴィスは激しく首を横に振った。

「じゃあ、何が原因なんだ？」

八志智は腕を組んで考え始めた。

キンコンカーンコン

「部活も終わったし帰るぞ、アヴィス。」

荷物を背負い、八志智が言った。

「はぁーい！」

アヴィスは元気いっぱいに手を上げた。

「あ！そうそう、今日は私もそっち方面に行くから一緒に帰ろう
！」

奈留がアヴィスに近寄って言った。

「んじゃ、いっしょにかえろう！」

アヴィスが微笑んだ。

てくてくてく・・・

「そういえば、奈留はこれから何しに行くんだ？」
帰りの交差点を曲がったあたりで八志智は聞いた。

「ああ、先生が如月君に渡しそびれたプリント、てゆか手続きの書類？みたいなのがあったらしくてそれを届けに行くのよ。これで先生の私への株が上がるわ！！・・・キラーン」

奈留が目輝かせている。

「てか、あいつどこ住んでんだよ？」

八志智は、奈留が持っていた住所の書かれたメモを奪った。

「えと・・・！！・・・これ俺ん家のとなりのアパートじゃん！」

八志智は目を丸くして驚いている。

「・・・。」

アヴィスが空の方をじっと見上げている。

「どうしたんだ？アヴィス・・・。」

「・・・。」

八志智が聞いているのに、アヴィスからの返事は返ってこない。

「どうしたの？」

奈留も心配している。

「・・・きた。」

バサツツ・・・

そう言うときアヴィスは翼を広げ、式服に着替えた。

サアツ・・・

すると、ビルの向こうからエリーザが出てきた。

「・・・ああ、みつかっちゃった。まあいいけど・・・。」

エリーザはそう言うとき銃を構えた。

「じゃ、始めるわよ。」

エリーザが笑顔で言う。

「きょうは、いどうしないの？」

アヴィスが聞く。

「ここはそんなに人通り多くないからいいじゃない。ってことでスタート！」

バア・・・ン

シャッ

スタートと同時にエリーザが銃弾を放った。しかし、アヴィスは剣に見立てた鍵で払い除けてかわした。

バツ！！ カチャ・・・

「・・・・・・・・！！」

払い除けて隙ができている間にエリーザが目の前にやってきて銃口をアヴィスの身体に押し付けた。

「やっと決着がついた。今更ビスに変わってもこれじゃあかわせないわよね。The endよ・・・。」

グルン・・・

「シールド・・・。」

ヴァンッ

アヴィスがそう囁くと球体の透明な壁が一瞬だけ彼女を包んだ。そして、エリーザはその壁に跳ね返され、アヴィスから遠ざけられた。

「・・・どういうこと？アヴィスとビスにはそんな能力はないはず・・・。」

エリーザは考え込んだ。

「久しぶりですね・・・エリーザ・・・。」

アヴィスはそう言うのと、少し笑みを浮かべた。前髪のせいで眼が隠れ、少し不気味だ。

「ああ・・・なるほど・・・あんだね・・・。」

エリーザは正体が分かったのか、冷静さを取り戻した。

「それにしても、相変わらずエリーザの登場の仕方・・・地味ですわ！」

グサツ！！

アヴィスが見下すように笑って言った。その言葉がエリーザの心に刺さったようだ。

「な、なんですってー！あんだだって相変わらず嫌味っらしい性格じゃない！！」

エリーザが言い返す。

「あらあら、凶星を着かれて言い返すなんて子供ですこと・・・
オーホホッ！！」

アヴィスは腰に手を置き、もう片方の手を口の前にかざし、甲高い声で笑っている。

「うるさい！！」

ダッ！

エリーザがアヴィスに迫ってきた。

シャラン・・・

一瞬、鈴のような金属音がした。

「・・・？」

みんな鈴の音がする方を見た。すると、和服を身に纏い、なぎなたのような長い杖を持った宗助がビルの上上に立っていた。

「くっ・・・またはずれか。天使と同じ周波数出してるからやつは見つけにくいな・・・。つか天使とか居なくていいんだよ。」

宗助がリーダーみたいなものを見ながらわけの分らないことを呟いている。

「宗助、おまえ何してんだ？！」

八志智が叫んで聞いた。

「ん？ああ、八志智とかいう奴か。・・・！！」

宗助がアヴィスの方を見た。

「やっぱり天使か。」

宗助が不機嫌そうに呟いた。

「何がなんだか知らないけど、とにかく攻撃よ！！」

バンッ バンッ バンッ

エリーザが宗助に向かって銃弾を放った。

シュツ シュツ シュツ スチャツ

宗助は銃弾を華麗に避けながらエリーザに迫っていき、杖のところが先端をエリーザの首の寸前で止めた。

「俺は天使が嫌いだ。けど殺しも嫌いだ。だからさっさと失せろ。」

宗助は鋭い眼つきでエリーザを脅した。

「フンツ・・・分かったわよ。今日はこのくらいにしといてあげるわ！次会ったときは覚えてなさい！！」

エリーザはそう言うその後ろ向きに帰っていった。

「・・・にしても八志智とか言ったつけ？あんな天使一匹も追いつけないでそこないの天使とよく契約したなあ。」

宗助が腕を組みながら言った。

（いや、契約しようと思って契約したわけじゃないし・・・。）

八志智が心で悟った。

グルンツ！！

「なんだと！！アヴィスに向かってそんなこと言うやつはこの俺様が許さねえ！！だいたいおまえだって、できそこないの陰陽師みたいな格好してんじゃねえか！！！」

ビスが怒鳴りながら言い返した。

「・・・・・・・・。」

宗助は、口をあんぐりと開けている。男口調に驚いているようだ。

「えと、その、なんだ？・・・おまえ女だよな？？」

宗助が言い難そうに聞いた。

「馬鹿か、おまえ！どうみても俺様はおと・・・・・・・・。」

ビスは自分の身体を改めて見た。

「いや、身体的には女だ！！でも男だ！！」

自信満々に言い切った。

「どつちなんだよ・・・。」

宗助は鋭い突っ込みを入れた。

「えと、とりあえず降りてきて話したらどうだ？」

八志智が案を唱えた。

「それもそうだな・・・。」

宗助とアヴィスは八志智に向かって降り始めた。

「・・・ってことはこの天使は二重人格なわけか。」

やっと宗助に分かってもらえたらしい。

「まあそういうわけだ。・・・ところで、その服なんかならねえのか？・・・人通りが少ないからいいものの、やっぱり恥ずいぞ。」

八志智が言い難そうに呟いた。

「仕方ないだろ。俺のこの式服は天使みたいに着替えれないんだから。杖は小さくできるけどな。」

（なら着るなよ・・・。）

八志智はあからさまに危ない人を見るような目で宗助を見ている。

「私はカッコイイと思うわよ、その格好！漫画に出てきそうだし！！」

奈留が潤んだ目で見ている。

「あ！！そういえば、さっきリーダーみたいなのもってたけどなんのリーダー？」

奈留が興味津々に聞いている。

「あれか、まあ、言ってもいいだろ・・・。」

ゴソゴソ

宗助はリーダーを取り出した。

「あれ？何の反応もないけど・・・？」

奈留が頭を傾けた。

「これはさつきみたいに天使が本来の姿、つまり式服の姿になったときに出る独特の周波数をキャッチして居場所をつきとめる機械だ。」

「おお~~~~!!」

みんな話しを理解したのか否かは分からないが、すごいものだというのは理解したらしい。

「でもこれで何探すんだよ?!」

ビスはやはり偉そうな口調だ。

「天使と同じ周波数を持ったやつ。そして天使を創った者……つまりフェニックスだ。」

宗助はリーダーをギュッと握った。

「でも見つけてどうすんだ？焼き鳥にでもして食うのか？」
ビスはよだれを垂らしそうになっている。

「血を飲むんだよ。そうすれば不老不死になる。って言っても俺は不老不死になりたいわけじゃないから、少量の血をもらえるだけでいいんだが……。」

宗助は少し下を向いた。

「あ!!そうそう!これ先生に言われてたプリント!……あと、入部届け!!絶対我が漫画研究部に入るのよ!!入らなかったら毎日ピンポンダッシュするから覚悟しときなさい!!」

奈留が人差し指を突きだした。

「なんで入らないといけないんだ？」

宗助が疑問に思っている。

「キャラ的に。」

さらっと奈留が答えた。

「……。」

宗助が絶句している。

「んじゃあ、プリントも渡せたし、帰るねえ!バイバイ!!」
奈留が走って帰っていった。

「んじゃ、俺たちも帰るか。……あんまその格好で俺に近寄るなよ……マジ恥ずいから。」

八志智が冷たい目線で宗助を見た。

家の前に着くと立ち止まって少し話をした。

グルン・・・

「そういえば、ソースはだれかいつしよにとがっごういくの？」
アヴィスが聞いた。

「いや、誰とも一緒に登校してない。これからもする気はない。」
(友達居なさそうだもんなぁ・・・。)

八志智は心の中で呟いた。

「じゃあ、あしたからいつしよにがっごういこお!!」
アヴィスはほのぼのとした声で言った。

「い、いや、だから一緒に行く気ないって・・・。」

宗助は必死に断ろうとしている。

「明日の8時にここ集合だよお!!」

アヴィスの耳には全く宗助の声が入っていない。

「んじゃ、バイバーイ!」

そう言うときアヴィスは八志智の背中を押して家に入ってしまった。

「・・・・この町の女はみんな強制的なのか?」

疑問に思いながら宗助もアパートに帰っていった。

第七話に続く・・・

第七話（前編） アリス（前書き）

長すぎたので前編と後編に分けます。ごめんなさい。

第七話（前編） アリス

こころこ 第七話（前編） アリス

（いつも、いつも俺様たちは夜に寝ると夢を見る。夢はいつも大きな屋敷の寝室から始まる。そこに俺様とアヴィスがいる。

『今日も外に行こうぜ！！』

いつも通りに俺様はアヴィスを外に誘う。

『おはなばたけがいいな』

アヴィスもいつも通りの満面の笑みだ。

『じゃ、さっさと行こうぜ！！』

いつも通りに俺様たちは花畑に向かった。

『みてみてー！またおはなのかんむりつくったのお！！ビスにあげるね』

今日は3日ぶりに冠を作ったらしい。

『ビス、にあってるよお』そだ！つぎはうでわつくろお！！』

って言っても、アヴィスとそんなに顔変わんねえんだけどな・・・。

『ありがとな、アヴィス。』

いつも通りの空、いつも通りの風景、いつも通りの遊び、全てがいつも通りで平和だ。けど少し今日は違った。

『・・・？』

アヴィスの腕輪を作る手が止まった。

『どうしたんだ？アヴィス？？』

アヴィスが久しぶりにマジな顔つきしてる。こりゃ、ヤバイことが起きるかも・・・。

「アヴィスが指差した方には木があった。その影から誰かがこつちを覗いてやがる。．．．ん？あいつ．．．ああ．．．そいえば存在忘れてたな．．．名前が確か．．．」

「うわっ！なんだ……目覚まし時計か……。まだ5時じゃないか……。」「

ビスはアライムを叩くように止めた。

ビスはまた布団の中に潜り込んだ。

ビスは後悔しながらも、ベッドから降りた。

ビスは指差し確認した。

ビスは炊飯器の方へ向かった。

心の中でアヴィスが叫んでいる。

67

『でも作りたいい〜〜!』

アヴィスが駄々をこねている。

「しゃーない……。あんま使いたくないけど……。」

キヨロキヨロ

ビスはキッチンからリビングを見渡した。

「おっ!」

リビングの出窓にぬいぐるみが飾られていた。八志智の妹が飾ったのだろう。

「これにすつか!……。つかこれイヌか?それともクマか?耳は三角だけど顔はどう見てもクマだよな?」

たしかにしっぽの長さも中途半端で見分けがつかない。

「まあ、とにかく。」

ビスはぬいぐるみの頭におでこをそつとくつつけた。

「我が魂よ、この身を離れ、汝に宿れ……。」

ビスがそう言うとないぐるみに一瞬、光が灯った。

「……。成功したみたいだな……。」

わきわき

ぬいぐるみが手を動かしながら言った。

「ビス、そのかつこうにあうよお。」

おでこをまだくつつけたままアヴィスが微笑んでいった。

「う、うるさい!!」

バツ

ビスはすかさずくつつけていた頭を離した。ぬいぐるみなのに頬っぺたが赤くなっている。

「さつさと弁当作んぞっ!」

ビスは必死に顔を隠しながら言った。

「おにぎりにどれ入れようかな?……。梅干とおかかと昆布、サケフレーク全部いっぺんに入れちゃえ!!!1個で4つの具が味わ

える！まさに一石四鳥だ！！！」

ビスはご飯を山ほど使って大きなおにぎりを作っている。ぬいぐるみで作業をしているのでゴム手袋をはめている。

「最後に海苔巻けば完成だ！」

全体に海苔を張っている。まるでボーリングの球みたいだ。

「さんぞくむすびつくったんだあ！でもおべんとうばこにはいるかな？」

アヴィスが心配している。

「大丈夫！！蓋で潰せば入るだろ！！ところでアヴィスはどんなおにぎり作ったんだ？」

振り返ってアヴィスのお皿の方を見た。すると、黒い固体や白い四角いものなどがはみ出ていた。しかも妙な形をしていて口にするのが恐ろしそうだ。ビスはムンクの叫びのように口を開けて愕然としている。

「……具、何入れた？」

恐る恐るビスはアヴィスに聞いた。

「えつとねえ……かりんとういれてみたの！！こんぶみたいにくろいからあうかなあっておもったの！あとねえ……かくざとうもいれてみたの！！……それからあんことか、あめとか……とにかくい……っばいつくったの！！！」

ビスは、目を輝かせて言っているアヴィスに怒ろうと思って怒れなかった。

「つ、次は唐揚げだ！！！」

ビスは話題を切り替えた。

「でも、からあげってどうやってつくるの？……やくの？にするの？」

そう聞かれてビスは悩んでいる。

（たしか……唐揚げは鶏肉に粉つけて熱した……なんだっけ？……液体だったのは確かだ。……黄色っぽい液体だったかな？……！！）

「みりんで茹でるんだ!!」

自身たつぷりにビスは叫んだ。しかし、明らかに間違っている。

「そつかあ!みりんでゆでるんだあ!!さすがビス、ものしりだねえ」

アヴィスも納得している。誰も彼らを止める人はいない。

「んじゃあ、俺様が鶏肉切るから、アヴィスは粉を用意しとけよ!」

ぬいぐるみの自分と同じ大きさくらいの肉切り包丁を不安定に持ちながらビスは言った。

「こな こなあゝゝ こなはどっこかなあゝゝ」

歌いながらアヴィスは片栗粉を探している。

「こつな こつな」 こながゝゝゝゝゝゝ あつたあゝゝゝ!!」

アヴィスが勢いよく両手を上にし、取り出した。袋には 重曹 と書かれている。片栗粉とは別物だ。

「ボールツ ボールツ ボールさん」

歌いながらボールに重曹を入れた。

「肉切れたけど、粉ちゃんと用意したか?」

ビスの方は大きさは不揃いだがなんとか切れたようだ。

「できたよー!!」

ボールをビスに持っていった。

「じゃあ、鶏肉にまぶすぞ!・・・そのまえに、みりんを鍋に入れて熱しとくか。」

ビスが鍋にみりんを大量に入れ、コンロに火を点けた。

「うし!それじゃあ、まぶして!茹でるぞ!!」

デロデロゝゝン

「うつ・・・あ・・・」

ビスの顔が一気にどんよりとした。

重曹が水分を含み、お肉は所々生のまま。見るに絶えない出来栄え

である。しかも、みりんの臭いとお肉の生臭さが混ざっている。

「い、一応食ってみようぜ！俺様はぬいぐるみだから食べないから、アヴィス食え！！生じゃないところはひよっとしたらうまいかも……。」

アヴィスは言われるがままに箸で取り、恐る恐る口に近づけた。
パクッ

「………。だいじょう……!!」

アヴィスはそのまま気絶した。少しすると意識が戻り、ほふく前進で流し台に向かった。

「ガラガラガラガラ　ガラガラガラガラ　ガラガラガラガラ

ガラガラガラガラ……。」

何回もうがいをしている。

「やはり、ダメか……向かい家の犬なら食うかな？」

ビスが考える人のような格好をしている。

グルンツツツ！？

「もう見ていられませんわっ!!」

いきなりアヴィスが首を回し、黄色かった瞳が青に変わった。

「へ?!」

ビスには何が起こったのか分からなかった。

トントントントン　シュンシュン

キッチンから包丁の音とお湯が沸く音がする。

タンタンタンタンッ

階段を眠たそうにパジャマ姿の八志智が降りていく。顔を洗いに洗面所に行こうとした。しかし、おいしそうな匂いに惹かれ、リビングに向かった。

「へえ、料理できたんだ。」

リビングからキッチンを覗きながら八志智が言った。

「料理が得意ですね。と言っても一番得意なのは遊ぶことですわ。」

「そう言うと、料理をやめて八志智を抱き倒した。」

「な、なにすんだよ！痛いだろ！」

八志智が怒っているのを無視して、八志智の顔や身体をまじまじと見ている。

「あら、今回の御主人様は可愛い子供ですね。この様子では一度も遊んだことがなさそうですね。」

未だに八志智の身体に乗っかかっている。そして八志智の耳元に口を持っていき、小さな声で言った。

「わたくしが大人にしてあげましょうか？・・・ボソッ」
ブンツツツ！！！！

「いたっ！！！」

何かが勢いよく飛んできてアヴィスの身体に当たった。

「なにやってんだ！！このエロ河童！！！」

飛んできたのはぬいぐるみ姿のビスだった。手をタコ糸でグルグル巻きにされている。

「馬のぬいぐるみがしゃべってる！！！」

八志智が驚いた顔で言った。

（これ馬だったのかよーーーー！！たてがみもひづめもない馬なんかぜってえいねえだろ！！）

ビスも真実が明らかになっただけで驚いている。

「エロ河童でどうゆう意味ですか？！」

アヴィスの顔がすごい剣幕でビスを睨んだ。

「そのまんまの意味だ！ボケエ！！てか、さっさと俺様の身体返せやっ！！！」

ビスも負けじと睨み返した。

「な、ん、て、す、って、えええ！！小童のくせにいいいい！！！」

二人の間に火花が飛び散っている。

「とりあえず・・・俺の身体から降りろ。」

八志智が呆れながら言った。

「お黙りですわ！！・・・あら、御主人様が言ったんですの？それなら仕方ありませんわ・・・。」

やっと八志智の身体から降りてくれた。

「・・・アヴィスじゃないよな・・・？」

立ち上がりながら八志智は聞いた。

「申し遅れましたわ。わたくし、アリス・フランスと申しますわ。アリスとお呼びなさっても構いませんわ。そこらへんの小童とは違い、家事は大得意ですよ！オー！オー！ホホホッ！！」

腰と唇に手をやり、甲高い声で嫌味ったらしく笑った。

ムツカァ

ビスから湯気が出ている。

「んで、その馬のぬいぐるみにいるのがビスか・・・。」

馬のぬいぐるみを指差しながら八志智が言った。

「オウツ！！にしてもよく俺様だって分かったな！」

少し怒りがおさまったようだ。

「俺様ってつけてる時点で分かるよ・・・。」

平然と八志智が言った。

「で、マジで身体返せ！！」

クルツとアリスの方を向いてビスが言った。

「なんで返さないといけないんですの？わたくしだって対価払ってますわ。この身体を使用する権利がありますわ！」

アリスは不機嫌そうに言った。

「おまえだとアヴィスの身体が汚れんだろがっ！！」

ビスがすごい目つきでアリスを睨んでいる。

「あら？・・・そんなこと言ってもいいんですの？？今この身体操ってるのはわたくしですよ。だから、あーんなことやこーんなこともやろうと思えばやれますのよ！オー！オー！ホホホッ！」

アリスがビスを見下している。

「ううっ・・・それじゃあ、学校に行くまでだかな・・・行っ

たら返せよ……。」

ビスはしょうがなくアリスに身体を譲った。

「わたくしの勝ちですわ！オーホホッ！！」

甲高い声が家中に響いた。

「では学校に向かって出発ですわ！！……って何故、この小童はぬいぐるみのままですか？」

八志智の鞆からはみ出している未だに馬のぬいぐるみ姿のビスを見ながらアリスが言った。

「この格好のままならおまえが変なことしたときにすぐに止めれるだろ。」

ビスがささやくように言った。

「変なことなんかしませんわ！！……だってこの……は……ボソッ」

アリスが小さな声で何か呟いた。少し悲しそうな顔をしている。

「どうしたんだ？……！！……如月、来たぞ。」

八志智が隣のアパートの方を見た。

「よっ！！」

宗助が挨拶をしてきた

「結構好きな子ですわ！……あら？残念……女持ちですわね……。」

アリスが宗助の周りをうるちよろしている。

「なんで、彼女いるって分かるんだ？？」

八志智が不思議そうに聞いている。

「簡単ですわ！！鞆のキーホルダー！明らかに女の子にもらったのバレバレですわ！！しかも見えるところにつけてるのを考えるとその子にベタ惚れですわ！！」

自信満々に言い張った。

「もらったのは確かだけど彼女じゃねえぞ。」

平然と宗助が言った。

「でしたら御姉様が妹かしら？・・・それならシスコンですわねえ。わたくし、シスコンには興味ありませんわ。」

「誰もあんたの好み聞いてないから・・・つか、あんた誰？」

宗助がアリスに指差した。

バシンッ！？

「失敬ですわ！御主人様でもないあなたに、わたくしに指差す資格なんてありませんわっ！！オーホホホッ！！」

アリスは思いつきり宗助の指差した手を平手打ちした。

「えと・・・どうなってるのこれ？・・・ボソッ」

アリスが甲高い笑いをしている間に、宗助は八志智とヒソヒソ話をした。

「なんかアリスとか言ってたが、正直俺もよく知らん！・・・ボソッ」

八志智が言い切った。

「学校に連れてつても大丈夫なのかよっ。天然と馬鹿の方がまだマシだぜ・・・ボソッ」

天然はアヴィスのことで馬鹿はビスのことらしい。

「誰が馬鹿だ、このアフォ！！」

八志智の鞆にいたビスが言い返した。

「わっ！なんだこの犬のぬいぐるみ！」

宗助がものすごく驚いている。

「ビス様だ！このアフォ！！」

ビスは怒鳴った。

「ビスかよ。脅かすなよな・・・つかそのアフォってなんだ？」
意外にも冷静だ。

「できそこない+アホだからアフォでいいんだよ！！」

ビスは宗助を殴ろうと必死に手を振り回しているが足っていない。

「いや、その理屈わけ分かんねえよ。」

宗助は手を振り回しているビスを見て、余裕な笑みを浮かべている。

「オーホホホ・・・は！笑っている場合じゃありませんわ！！
御主人様、さつさと学校に行くのですわ！！」
アリスはまだ笑っていたらしい。

第七話（後編）に続く・・・

第七話（後編） 体育祭（前書き）

新作の小説やらで遅くなっていました。ごめんなさい。

第七話（後編） 体育祭

こころこ 第七話（後編） 体育祭

「どーして、短パンなんですの?!」

アリスが開会式が終わったと同時に不満をぶつけた。

「短パンのどこが悪いんだ？」

八志智が呆れながら聞いた。

「だって先々代の御主人様の頃はブルマでしたわ!! なのにこんな短パンではわたくしのうつつくしいー脚が見えないではありませんの!! 校長に抗議してやりますわ!!」

アリスはすごい不機嫌な顔をしている。

「そんなくだらないことで抗議すんなよ。つか2年生の最初の種目の玉入れ始まるぞ。そろそろビスに変われよ。」

八志智が忠告した。

「玉入れなら、わたくし得意ですわ! だから変わる必要ございせんわ!」

アリスが自身満々に言った。

「・・・そいえば、わたくしたちは何組ですの？」

アリスが初歩的な質問をした。

「2年A組!間違えて他の組のところに玉入れんなよ!!」

八志智が忠告した。

【玉入れに出場される2年生の女子はすみやかに入場門に並んでください。】

スピーカーから放送された。

「まあ、せいぜい、華麗なわたくしの姿を見ていてくださいませ。オーホッホッホッ!!」

また高笑いをして、アリスは入場門の方に向かっていった。

ポン ポン ポン

アリスの言ったとおり、アリスの投げた玉は面白いくらいにかこの中に入っていく。

「わたくしの玉は百発百中ですわ！オーホッホッホッ！！」
笑いながら投げている。

「あいつほんとに得意だったんだな。」

八志智と宗助はアリスのことを少しだけみなおした。

【ピピーーーーッ！！玉を投げるのを終了してください。・・・それでは数えます。1、2、3、4・・・41、42、43・・・ただいまの勝負、一位はA組！！】

「イエーイー！！！」

いろいろなところから喜ぶ声が聞こえた。

「次の綱引きも騎馬戦もわたくしが勝ってみせますわ！！！」

アリスからはすさまじいオーラが見えている。

【ここで、1時間の昼休憩を挟みます。生徒の皆さんは時間厳守を守って昼食を食べてください。】

「ってことで天気の良い外でみんなで食べましょう！！！」

そう言うのと奈留はアリスと八志智、宗助、ぬいぐるみのままのビスを連れて校舎と校庭の間にある芝生に行った。

「今日、お弁当、アリスちゃんだっけ？作って来たんでしょ！」

奈留がワクワクしながらアリスに聞いた。

「ええ、作って来ましたわ！！初めて和食に挑戦してみました、料理上手のわたくしにはこんなの朝飯前でしたわ！！オーホッホッホッ！」

アリスはそう言うってお弁当の蓋を開けた。

「うっわぁー！！スゴイじゃない！！！」

奈留が興奮している。

「たしかにすげえな……。」

宗助も感心している。

「フワツフワツの玉子焼きだぁー！ただっきまーす！！おっ
いしーい！！」

奈留がつまみ食いた。

「でも、料理だけでなく、玉入れも綱引きもとくだったんだ
な……。特に騎馬戦なんかすげえスピードで鉢巻取りまくってお
まえの騎馬が圧勝だったよな。」

八志智が改めて感心した。

「そりゃ、そうだろ。もともとこいつは騎士だったらしいし……。
」

ぬいぐるみのままのビスが言った。

「え？！騎士ってあの王様を守るやつだろ？」

宗助が耳を疑った。

「ええ、してありましたわ。だから、もともとわたくしは人間で
すわ……。」

アリスにさっきまでの声の張りが無い。

「やっと見つけた！！あなたたち何のん気にお弁当なんて食べて
んのよ！！」

エリーザがやって来た。どうやら今日は私服のようだ。

「うわっ！なんて可愛い私服！カメラ持ってくればよかった
」。

奈留が後悔している。

「うっさいわね！今から式服になるからいいの……。グウ
」

エリーザのお腹が鳴った。

「エリーザもなんか食うか？アリスのまあまあ食えると思うぞ！
ビスが手を振りながら言った。

「失礼ですわね！！みんなおいしいって言ってくれてますわ！ぬ

いぐるみで食べれないからってそんなこといわないでくださる?!」
アリスが怒っている。

「……ワサビロール……ボソッ」

エリーザが小言で何か言った。

「は??」

みんな聞き取れなかったようだ。

「ワサビロール!!!!!!それ食べさせてくれたら今回は何もせずに退散してあげるわよ!!」

エリーザが大声で言った。

「ワサビロール?……なんだそれ??」

ビスが頭を傾けた。

「わさび巻きよ!わ・さ・び・巻・き!」

エリーザいちいち叫んで教えた。

「んなもんあるわけ……」

「ありますわよ。これでしょう……」

そう言うときアリスはエリーザにわさび巻きを手渡した。

「ずっと前に大好物だって言っていましたものね。」

アリスがニコツと笑った。

「覚えてたんだ……」

エリーザが照れくさそうに言った。

「ってことでこの借りはいつか返してもらいますわよ!!オーホッホッホッ!!!」

さつきとは全然違う人のようにエリーザは甲高い声で笑っている。

「やっぱり、そういう裏があつたのね!!そーゆーひねくれた根性どうにかしたほうがいいわよ!!」

エリーザは、もらったわさび巻きを握りつぶすくらい強く握った。

「あら、あなたも野性的本能丸出しのところ、どうにかした方が
良いんじゃないかって?!!」

アリスの頭に怒りマークが出ている。

「な`んでずっでー!!」

エリーザから火花が散っている。

「そーゆーところが野性的だと言っているんですわ!」

アリスも負けじと火花を散らせた。

「まあ、ケンカはその辺にして……。そういえば、最後の種目の選抜リレーってアリスが出るの? ビスが出るの?」

奈留がケンカから話を逸らした。

「わたくしは、短距離は平気ですけど、リレーとなると……。」

アリスはあまり自身がないらしい。

「……となると、やっぱり、俺様だろう!!」

ビスが短い腕をなんとか曲げて、ガッツポーズをとっている。

「ってことでそろそろその身体返してもらっぜ!」

ビスはぬいぐるみの身体をアリスのおでこにくっつけた。

シュ……ン

アリスの蒼い瞳からビスの緑の瞳に変わった。

「うっしやー!! やっぱりこっちの身体の方が身動き楽だー!!。うし! 選抜リレーがんばるぜ!!」

腕をぐるぐる回しながらビスが言った。

「俺様の出番はアンカーみたいだな!! うっしやー! 一番良いポジションじゃねえか!!」

やる気満々だ。

「学校では女の子の設定だからそのしゃべり方は止めた方がいいんじゃない?」

苦笑いで奈留が言った。

「ところで、何週走るんだ?」

ふと、我に返り、ビスが聞いた。

「女子は半周だけど、アンカーだから一周だったはず……。」
八志智が教える。

「一周? みじけえな。ま、圧勝してやらあ!」

アリスと同じでビスも自信満々だ。

「……って言ってもその前に部活リレーに出てもらっから。も

ちろん、コスプレして!!」

いつの間にか、奈留の手にはピンクのチアガールの衣装があった。

「……………!!」

ビスがものすごく暗い顔をした。

【これから、2年生による選抜リレー女子の部を開始します。第一走者、第二走者の方は位置についてください。】

「ガンバレーーーー!!」 「負けんなよーーーー!!」

いろんな人への応援が聞こえる。

「位置について よーーーーい」
「パアア……ンッ!!」

リレーがついに始まってしまった。

【ただいま、スタートしました!どうやらトップはA組です!そして、C組、E組、D組、B組の順に団子状に並んでいます。】

「へえ……結構うちのクラス強いじゃねえ……強いわね。」

ビスは周りの目を気にして、奈留に言われたとおり、女らしい言葉を使った。

【バトンは第一走者から第二走者に渡されました!トップは変わらず、A組です!!それをC組、E組がすぐ後で追いかけます!!】

ゴソゴソ ゴソゴソ

「なにやってんだ、菊池?」

奈留が校舎から何か持ってきたらしい。

【バトンが第二走者から第三走者に渡されます。A組とC組との間が短くなってきました!!】

「このカメラで決定的瞬間を収めるのよ!連射も可能よ!!」

満面の笑みで奈留はカメラを構えた。

「あっそう……。」

八志智と宗助はスルーした。

【第三走者から第四走者にバトンタッチ！！A組今のところ逃げ切っています。】

「やつと次か・・・こんならくしよ・・・」

ギロツ！！

他の組のアンカーたちがビスを鋭い眼つきで睨んだ。

「な、なんでもないわ、なんでも！！」

（女ってこんなに恐ろしい生き物だったとは！！）

ビスは女の恐ろしさに気付いた。

（そろそろか・・・。）

ビスは走り始めた。

パンッ

ビスにバトンが渡った。

「さすがビスだな・・・これじゃ心配いらねえ・・・」

八志智が安心した瞬間だった。

カラランッ

ビスはバトンを落としてしまった。

（やべっ！！）

ビスはすぐに拾い上げたがその間にC組に追い抜かれてしまった。

【A組がバトンを落しました！どうやら、右手に持ち帰る際に滑ってしまったようです！！C組がトップです！しかもA組とはかなりの間が開いています！！】

「なにやってんだよ！あいつ！！どうやっても勝ち目ねえ・・・」
みんなからブーイングが飛び交ったとき・・・

ダダダダダダダッ

「くおんのヤンロオー！！なめやがって！！こちとらマッ

ハで走ってやらぁー！！！！！！」

ビスがすごい速さと剣幕で追いついてきた。腕を直角に曲げ、ものすごい速さで振っている。

ぽかーん・・・ ヒソヒソ・・・

「あれってほんとに永山さん？」 「いつもとキャラ違うくない？」

「てゆかあれが本性なんじゃ・・・。」

一瞬、みんな開いた口が塞がらなかったが、その後、ヒソヒソ話があちこちから聞こえた。

パアア・・・ンツ！！

みんながひそひそ話している間に、いつの間にかビスがトップでゴールしていた。

「・・・え、うそ？！シャッター押し忘れた！！」

奈留が折角持ってきたカメラは決定的瞬間を撮り逃してしまった。

「・・・にしても選拔リレー、あっけなく終わっちゃったわね！」

閉会式で奈留が小声で話した。

「ん・・・あ、そうだな・・・。」

八志智が簡単に返事する。

（・・・にしても、さっきからビスの様子がおかしい・・・。なんか考え事してるのか？）

八志智はチラリとビスの方を見た。

すると、ビスはジッと左手を見ていた。

第八話に続く・・・

第八話 S n o w W h i t e (前書き)

今回は短縮しすぎたかも。
反省します。

第八話 S n o w W h i t e

こころこ 第八話 S n o w W h i t e

「じゃじゃーん！！見てみてこの衣装！テーマは【和】！近頃なにかと流行ってるからねえ！！」

奈留とビスと未来が衣装を着て、きれいにラッピングされたクツキーの袋を持っている。

「なんでこんな格好してクツキー売らなきゃいけないんだ？」

ビスが嫌そうに衣装をばたつかせた。

「だってコスプレ喫茶は人数的に無理かなあ・・・って思ったからクツキー販売にしようって決まったじゃん！」

奈留がうなずきながら言う。

「誰が決めたんだよ！そんなこと話し合った覚えないぞ！それに、何でコスプレなんだよ！普通の制服でいいじゃん！」

ビスは怒り気味で言った。

「分かってないなあ。ふつつーの制服で売ったって面白くないし、目立たないじゃない！！コスプレしてれば面白いし、目立つから人が集まってくるじゃない。そしたら自然と売り上げもアップするじゃない！！」

奈留はガッツポーズしている。

「へいへい。」

ビスが二回返事する。

「けっこつ綺麗な衣装ですわね。」

アリスが黒猫のようなぬいぐるみの姿をしている。

「ところで、おまえ、なんでぬいぐるみの格好なんだ？」

八志智が指差して言った。

「午後から劇をするとお聞きしましたので。劇のような非現実的

なものは嫌いですわ。見たくありません。とくに姫や王子が出てくるものは……。ところで、この黒猫のぬいぐるみ、御主人様の妹様が作ったんですの？とても綺麗ですわ！このしっぽの長さがすばらしいですわ！」

アリスがしっぽを振り回している。

「それ……。黒豚らしいんだが……。」

「……。今、なんと？」

アリスが聞き返した。

「だから、黒豚。」

「……。こんな小さな鼻でスマートボディの豚がどこにいるんですの！！しっぽなんて明らかに猫ですわよ！！製作者絶対、頭おかしいですわ！！！」

アリスが大声で怒鳴った。

「俺にそんなの怒鳴られても、妹のセンスだし……。」

八志智がぼりぼりと頭を掻いている。

「センスの問題ではありませんわ！！頭の問題ですわ！！！」

アリスは怒鳴り続けている。

「そういえば、うちのクラスの劇ってなんだっけ？」

奈留が話を逸らした。

「白雪姫だろ！アヴィスが白雪姫！だから、午後からはこの身体使えねえんだよなあ……。なのにこんなクッキー売りなんて……。俺にも自由が欲しいなあ……。」

ビスの表情が暗くなった。

「王子様役は如月君だよね！」

奈留が宗助の方を見た。

「ああ……。」

宗助はあまり乗り気じゃない。

【ただいまより、2年A組による白雪姫を行います。】

体育館の中には大勢の人が集まっていた。

【むかし、むかし。あるところに白雪姫という美しい女の人がい
ました。・・・】

ナレーションが始まり、アヴィスの演技が始まった。

「ところで、奈留はナレーターのようにですけど、御主人様は何の
役ですの？」

ぬいぐるみの足をバタつかせながらアリスは言った。

「どうせ、幕を開いて、閉じるだけの雑用だよ!!」

八志智にはアリスの台詞が嫌味ったらしく聞こえたようだ。

「ところで、劇は見たくなかったんじゃないのかよ!」

八志智はイライラしている。

「ええ、そうですね。でも、気になることが・・・。」

アヴィスの方を見た。

チラッ

今度は八志智の左眼を見た。

「なんか、顔についてるか？」

「いえ、なんでも・・・。」

アリスは眼を反らした。

「にしても・・・アヴィス、元気ないですね。」

「えっ!」

そう言われて、八志智はアヴィスの方を見た。

「いつも笑顔だけど、今日は寂しげですね。」

（たしかに、アリスの言うとおり、少し寂しそうだ。なんでだろ
う?・・・!!）

八志智は何かに気付いたようだ。

「アリス、頼みたいことが・・・ゴニョゴニョ」

八志智は何か思いついたことをアリスに話した。

【小人たちは毒リンゴで倒れた白雪姫を見つけ、大慌てです。】

「そろそろ、如月君の王子様の登場ね！」

ナレーションを一段落終え、奈留が部活用のビデオカメラの確認をした。

「よし！ちゃんとさっきの場面も撮れてたし、ビデオの残量もまだ余裕！！ラストスパートは絶対完璧に撮ってやる！！」

奈留は気合充分だ。

【そこへ、王子様がやって来ました。・・・？】

ナレーションの後、すぐに舞台に出るはずだった王子様がなかなか出てきません。

「なにして・・・！！」

コツコツコツ・・・

舞台裏から出てきたのは宗助ではなかった。

「あの人って・・・。」

奈留は見覚えがあるらしい。

舞台の役者たちは王子様役の人が急に変わったのでとても困った顔をしている。アヴィスは横たわって目を瞑っているので何が起こったのか分からないようだ。

「ごめんな、如月。」

舞台裏で八志智が宗助に向かって謝った。

「べつに・・・やりたくなかったし。それより、あいつ誰？」

「ああ・・・あいつ・・・。」

八志智は少し寂しそうな顔をした。

「あたしが連れてきたのよ！てゆか頼まれたの！！」

舞台裏の小窓からエリーザの姿が見えた。

「一応、この前のワサビロールの貸しを返しただけ！それだけだから！次からは敵として戦うんだから、覚えときなさい！！」

エリーザは、ビシツと人差し指を突き出した。

「でも、これでアヴィスが笑ってくれますわ。・・・つまり、わたくしのワサビロールのおかげですわ！オーホッホッホッ」

アリスはいつもより小さな声で笑った。

「キスするまねするだけだからじつとしてね・・・ボソッ」
アヴィスの耳元で誰かが囁いた。そして、そつと頬に触れた。
パチリッ

アヴィスが目を開くとそこには勇の姿があつた。

「・・・？あ！えと、えと・・・王子様ありがとうございますございました。だっけ？」

アヴィスは突然勇が現れたので台詞を言うのに戸惑ってしまった。

「あゝあ。演技力に欠ける劇になってしまいましたわね。」

アリスがガツカリしている。

「でも・・・あいつ楽しそうだな。」

宗助がアヴィスの顔を見て言った。

「ええ・・・そうね。・・・でも、そろそろ危ないかも・・・ボソッ」

アリスが何か呟いた。

第九話に続く・・・

第九話 クリスマス

こころこ 第九話 クリスマス

「メリークリスマス！！イサムく、きたよー！」

サンタ服のような白と赤のドレスを身に纏い、アヴィスが言った。
漫研部員全員も一緒に来ている。

（この間の文化祭のときにアヴィスと西園寺勇とかいうやつは電話番号を交換したらしい。それでこの前の日曜日……

「うん、そうそう……そうなんだあ！……」

「アヴィスちゃん誰と電話してんの？……バリボリ……」
奈留が遊びにきて、煎餅を食べながら聞いた。

「ああ、この前の西園寺ってやつ。……ズズッ」

お茶をすすりながら八志智が答えた。

「ふーん……バリッ」

煎餅を貪りながら奈留はアヴィスの方をじーーーーっつと見た。

「どうかしたか？」

八志智が聞いた。

「え、あ、ちよつとね。ケータイより受話器の方が萌えるなあつと！コードのクルクル具合が……」

「さっさと帰れ。」

八志智が冷静にツツコミを入れた。

カチャンッ……

「ヤシチー！ー！！イサムのがくえんでクリスマスパーティーってゆーのやるんだって！！！」

電話を切って興奮しながらアヴィスが八志智に後ろから抱きついた。

「アヴィス、離れる！」

顔を赤くして八志智が言った。

「いこうよー！！クリスマスパーティー！」

八志智の背中を揺らしながらアヴィスが言った。

「わかった！行くから離れる！」

八志智の顔は林檎のように真っ赤になっていた。

なんてことがあつて来てみたけど・・・

八志智はチラッとアヴィスの方を見た。

（あいつ、西園寺と楽しそうに話してんなあ・・・これ、どうしようかなあ・・・）

「あら、その左手に持っている可愛い箱はなんですか？」

黒猫・・・ではなく黒豚のぬいぐるみ姿のアリスが八志智の左手を見た。

「まさか、アヴィスへのプレゼントかしら？」

アリスがクスリと笑った。

「ちが！・・・そうだけど・・・」

八志智はチラッと勇の方を見た。

「・・・他人なんて関係ありませんわ！」

ところで、それはサンタとして渡すんですの？それとも八志智として渡すんですの？」

アリスが聞いた。

「うるさいな！どっちでもいいだろ！！」

そう言うと八志智はアヴィスの方へズカズカと歩いていった。

「アヴィス、ちょっと来い。」

アヴィスの右手首をガシツと掴むと中庭へ出て行ってしまった。

「へえ。御主人様も結構大胆ですわね。」

アリスがまたクスリと笑った。

「アリス、ちょっと話が・・・」

アリスが振り返ると、ぬいぐるみ姿のビスがいた。

「あなたもぬいぐるみの格好してるんだ。」

アリスが少し驚いた。

「今日くらいアヴィス一人に身体使わせた方がいいだろ。クリスマスなんだから。」

ビスが腕を組みながら言った。

「へえ。あなたも少しは空気読めるんですね！」

アリスがビックリしている。

「空気くらい俺様にも読める！！・・・そんなことより、アリスは気付いてるんだろ・・・？」

ビスが少し暗い顔をした。

「・・・左眼のことでしょ。」

アリスが真剣な顔をした。

「いつから知ってた・・・？」

「あの子が入ってきたときから・・・つまり契約を交わしたときからですわ。」

「なんでそのとき言わなかったんだ？」

「言ってもどうしようもできないと思ったからですわ。」

「・・・どうりで対価が合わないはずだ。普通なら、交通事故を救っただけなら左眼の“力”で契約が済むだけだったのに・・・でもあいつの左眼の“力”の方が価値のあるものだった。だから俺様たちの契約期間が延びた・・・。」

「左眼の“力”の方が価値が高いのは当然よ。何故ならあの子の“力”と魂が入っていたんですもの。」

「・・・。」

「・・・。」

二人とも沈黙してしまった。

「・・・わたくしたちではもう抑えられませんか・・・。」

「

「・・・せめて今日、目覚めないことを祈るか・・・。」

二人は窓越しに星空を見上げた。

「ヤシチ、どうしたの？」

中庭に呼び出されてアヴィスは不思議そうな顔をしている。

「えと、その・・・。」

八志智は左手を隠しながら戸惑っていた。

ふわ ふわ ふわわん

雪が降りだした。

「ヤシチー！ゆきだよー！！！」

アヴィスはがしやいでいる。

「・・・・・・。」

八志智はプレゼントを渡す決心をしたのか、プレゼントを持っている左手をギュツと握った。

「あ、あのさ！」

コトンッ・・・

つい力が入りすぎたのか、プレゼントを落としてしまった。

「？・・・・・・なにかおちたよ。アヴィスがひろってあげる！！」
そう言くと、アヴィスがしゃがんだ。

バアアアアア・・・・・・ン

雪の中を銃声だけが響いた。そして、誰かの倒れる微かな音がした。

第十話 死神

こころこ 第十話 死神

バアアアアアア・・・・・ン

雪の中を銃声だけが響いた。そして、誰かの倒れる微かな音がした。

「・・・・ヤ・・・・シチ・・・・・？」

撃たれたのは八志智だった。左胸の下辺りから大量の血が散った。アヴィスには何が起きたか分からず、しゃがみこんだまま上を向いた。

ピ・・・・・チャンツ・・・

アヴィスの左眼に八志智の血が飛び散り、触れた。

「あら、アヴィスを狙ったつもりなのに、契約者に当たっちゃった。不運なやつ。」

銃を右手に持ち、たいぎそうにエリーザが雪の中から現れた。

くちゃ・・・・ぬちゃ・・・・

アヴィスの方から奇妙な音がする。

「クククツ・・・今日はさすがにこのわらわも出まいと思っていたが・・・とんだ空気の読めぬ童わいしがいたものだ・・・ぺろっ」

右眼を左手で覆いながら、飛び散った血を舐め、エリーザの顔を見た。いつものアヴィスと違って不気味な笑みだ。

シャキンツ

右手に持っていた十字架の鍵が鎖鎌に変形していた。

「さつき銃声しなかったか？」
ビスが言った。

「そんな気もしますわね。」

アリスが答えた。

「そんな音、全然しなかったけど・・・？」

奈留には全く聞こえなかったようだ。

ボタツ ボタボタボタツ

「ハアツハアツ・・・。」

エリーザの利き腕から大量の血が飛び散った。

「おや？もう銃が使えないようだな。□ほどにもない童だったな。」

「あんた、アヴィスじゃないでしょ。誰よ？」

「クククツ・・・わらわに名前を尋ねるなんて愚かな童だ・・・

・わらわには名前なんてものはないんだよ・・・強いて言うなら、人間は死神と読んでいるな。」

死神は鎖鎌を改めて構えると、パーティー会場の方を見た。

「死にかけの童を殺しても、何の面白みもない。悲鳴を聞くのがわらわの楽しみだからねえ。ちょうど今夜は宴をしているようだ。

楽しめそうだ・・・クククツ」

「さつき、銃弾の音したろ！」

宗助がビスに近寄ってきた。

「宗助も聞こえたのなら、間違いないわね。」

アリスは冷静だ。

ジャリン・・・シャリ・・・ン

「・・・何か音が聞こえる。・・・やばい！！伏せろ！！！」

ガシャアアアアアンツツッ!!!

「鎖鎌って本当に便利だ。遠くから攻撃できて、自分の手は汚れないなんて・・・まさにわらわに相応しい武器だろう・・・。」
窓ガラスの割れる音が会場内に響き渡った。

「みんな、大丈夫か?・・・!!」

ビスが少ししてから目を覚ました。目の前には先ほどとは全く違う景色があった。壁は血で紅く染まり、床には人が何人も倒れ、身動き一つない。

「何が・・・起こったんだ?」

宗助とアリスは無事ならしい。奈留は意識を失っているようだ。

「なんだ、まだ息のできる者がいたのか・・・クククッ」

死神が振り返り、ビスたちの方を見た。

「アヴィス?」

「違うわ!左眼が紅いわ!!右眼は・・・泣いてますわ・・・。」

「アリスの言うとおり、左眼は紅く、右眼からは大粒の涙がこぼれていた。」

「右眼はアヴィスのままなんだよ、きつと・・・。」

「自分の身体なのに止めたくても、止められない。やっぱりあの子の方が力が強かったようですね・・・。」

「どうやら、貴様たちはこの身体の持ち主のようだ・・・なら、消しておいたほうが、わらわの邪魔になるまい。」

「くそ、中庭まで逃げるぞ!!」

ビスたちは会場を出て行った。

「逃がしはしないさ・・・クククッ」

「御主人様！！エリーザまで・・・。」

中庭には、八志智とエリーザが横たわっていた。

「ビス・・・か・・・。」

エリーザはなんとか話せるようだ。

ジャリンツ！！！！

「見つけた・・・皆まとめて消し去ってやろう・・・。」

ガツ・・・

「お待ちなさい。」

死神が鎌を振りかざそうとした瞬間、誰かの声がした。

「だれ？」

ビスは空を見上げた。

闇を照らし、炎のように赤い翼。鋭いくちばし。宝石のように輝く瞳。

「フェニックスだ・・・。」

宗助が呟いた。

「死神、武器をおさめなさい。」

シュン・・・

死神は言われるままに鎖鎌を元の十字架の鍵にした。

「天使が人間に危害を加えるとは・・・罰を与えねば。それより、この事態を元に戻すのが優先すべきこと・・・。」

ガッ!!

フェニックスはくちばしで自ら脚を傷つけた。

きらきらきら……

フェニックスの脚から光り輝く血が雪のように降り注いだ。

ざわざわざわ……

会場からは、何もなかったかのように次々に人が起き上がった。割れた窓ガラスも血に染まった壁も元通りになっていた。

「これでいい。さて、そなたたちには罰を与える。エリーザ、そなたには、力の奪い合いを自らしてはならない。つまり、自分から攻撃してはいけない。」

「そんなんじゃ力が集められないじゃない。」
エリーザは反発した。

「契約を完了していけばいいだろう。さて、問題は死神の方だが……誰にも危害を加えてはならない。例え、それが天使でも人間でも。それに、その身体は本来アヴィス、ビス、アリスのものである。だから、その者たちの許可なく使用することを禁ずる。」

「わらわはそんな掟、聞かない……と言ったら……？」

「私に逆らえばどうなることかなど死神なら分かると思うが……」
・？」

「チッ」

死神は舌打ちをした。

「フェニックス、契約者の出血が止まらないんだが。」
ビスが八志智を見て言った。

「この者に血を与えるのを忘れていた。今、与える……。」

何故かフェニックスは、八志智にだけ血を与えるのを忘れていた。
きらきら……

「これで意識も戻るはずだ。それでは……。」

フェニックスは背を向け、翼を広げた。

「待て！！血を分けてほしい！」

宗助はフェニックスを止めた。

「それはならぬ。」

「何故だ？」

「そなたが我が血を欲する理由はどうあれ、それは私の作った天使が犯したものではない。私は、天使が犯したもののならば、それを償うために血を流す。それだけだ。」

バサッ！！！！

フェニックスは大きな翼を羽ばたかせ、去っていった。

宗助はギュッと手を握り、悔しそうにした

会場から聞こえてくる音と雪のしんと積もる音だけが辺りに響いていた。

第十一話に続く……

第十話 死神（後書き）

今回終わり方が微妙だったかもしれません・・・。
すいません。

第十・五話 名前

こころこ 第十・五話 名前

(今日も俺様たちは夢を見る・・・)

『きょうからふえたねー！ー！死神ちゃんが。』

にこにこしながらアヴィスが言った。

『でも、死神って名前じゃなくねえか？』

ビスが微妙な顔つきをしている。

『わらわに名前など必要ない。』

不機嫌そうな顔で死神が言う。

『名前考えてあげたらいいんじゃない？』

アリスが提案した。

『じゃあ、デスってのは？』

ビスが簡単に思いついたことを言った。

『それdeathからとたでしょ。あまりいい言葉じゃないです

わ。』

アリスが呆れている。

『んじゃ、お前が考えろよ！』

ビスは不機嫌になった。

『わたくしはあなたみたいな小童よりネーミングセンスは抜群ですわ！オーホホホッ・・・洋風にマリーなんて名前はどうぞ・・・』

・

『やだ。』

死神は即答で答えた。

『ぶっ・・・あっさり断られてやんの。』

ビスがアリスを見ながら嫌味つたらしく笑った。

『お黙り!! Shut upですわ!!』

アリスが怒った。

『ツバキ!!』

『?』

アヴィスがいきなり叫んだ。みんなはきよんとして不思議そうにアヴィスを見つめた。

『なまえ、ツバキがいいよ!おめめあかくなるし、わふうだし!おはなのなまえでかわいいし!!』

アヴィスが満面の笑みで死神を見つめた。

『かつ勝手にすればよいだろう。。。』

死神はふいつとアヴィスから視線を離れた。顔まで赤くなっている。

『んじゃ、椿に決定だな。』

ビスが言った。

『決定ですわね。』

アリスも納得のネーミングらしい。

・・・なんか、死神が来たのにこんなにほのぼのしているのかと俺様は思っている。)

第十一話に続く・・・

第十一話 二月といえば

こころコ 第十一話 二月といえば

バコッ!!

「あいたっ!」

兎のような垂れ耳のぬいぐるみの眼から、じわつと涙が零れた。どうやらこのぬいぐるみはアヴィスらしい。

「ちゃんと温度計見ないとチヨコがまずくなるでしょ!」

丸めた雑誌を振り回しながら、黒豚のぬいぐるみが怒った。このぬいぐるみがアリスのようだ。

「だつてえゝゝゝ・・・ヒックヒック」

アヴィスはとうとう泣き出してしまった。

「そこ、泣かない!あとそこ!ちゃんとかき混ぜる!!身体使ってるのはあなただから、その分、ちゃんと作りなさい!」

アリスは怒鳴り散らした。

「なんでわらわがこのような事を・・・それにどうしてこの童まで?」

椿はちらつと横を見た。

「あたしだつて来なくなかったわよ!!けど、アリスが無理やり・・・」

エリーザが大声で言う。

「なんてったって、今日はバレンタインですもの・・・にしても日本人って変わってるわよね。チョコレートあげるなんて・・・」

アリスがチヨコを刻みながら言った。

「お菓子会社の思惑だからだろう。」

椿が言った。

「んじゃあ、チョコじゃなくてもよくない？」

エリーザが言う。

「お饅頭がいいな」

アヴィスが泣き止んでいる。

「それは手作りするのが難しいと思うが・・・。」

「ええっ！！日本人って全員饅頭手作りするんじゃないの？！」

「そなた、馬鹿だろ。」

エリーザが衝撃を受けている。

「お餅あげるとかはどうかしら？あれならまだ作るのまだできそうですし。」

「正月か？！それに華がないだろ。」

「・・・。やっぱりバレンタインにチョコ考えた人は天才ですね。」

「あたしは始めから頭いい人だと思ってたわよ。」

アリスとエリーザが妙なところで張り合っている。

「ビスー！どうした？」

八志智が廊下で馬のぬいぐるみを見つけた。そのぬいぐるみがビスのようだ。

「今日は男はキッチンに入っちゃいけないんだとさ。でも、今、椿が身体使ってるから変なことしないようにこっそり見張ってる。」
ビスは廊下から、リビング越しにキッチンを見ている。

「椿って死神のことか？」

「そ、アヴィスが名付けた。さすがアヴィス！ネーミングセンスは俺様の次にいいぜ！」

ビスは首をコクコクと縦に振った。

「できましたわっ！！！大きいのが一つと小さいのが三つ、合

わせて四つ・・・あら？・・・御主人様、ビス、宗助、勇・・・
・あと一人いたような・・・オタクっぽい子だったような・・・
まあ、それだけ影の薄い子だからあげなくてもいいですね！」
アリスは三夫のことを忘れていた。

「ハアー・・・やっと帰れる・・・。」

エリーザは疲れきっている。

「おつかれさま～。でもたのしかったね。」

アヴィスはぬいぐるみをチョコだらけにして言った。

「どこが？！ぜんっぜん楽しくない！てゆかあんたチョコ付きすぎ！ちゃんと洗わないと染みになるわよ！！！」

そう言っていると、エリーザは翼を羽ばたかせ、窓から去っていった。

「大きいのは俺様のかな？それとも勇か？」

（たぶん西園寺の方だと思う・・・。）

ビスと八志智は大きいチョコが気になるようだ。

「それじゃ渡しに行きますわよー！！！」

アリスがそう言ってぬいぐるみのまま玄関に向かいだした。もちろん、アヴィスと椿も一緒だ。

「やばい！こっち来る！」

ビスと八志智は慌てて階段に上り、二階に隠れた。

「宗助に渡してきましたわ。そしたら、「なんでぬいぐるみのまま？！」って突っ込まれましたわ。ところで、アヴィスはちゃんと勇に渡せた？」

アリスとアヴィスは家に帰ってきた。まだアリスはぬいぐるみのままだ。

「うん、わたせたよ」ツバキが身体つかわしてくれたから、天

使ってことばれてないよ」

「いや、それ元々わたくしたちの身体ですわよ。」

アリスが突っ込んだ。

「あと渡すは、御主人様とビスだけですわね。どこにいらっしゃるのかしら？」

アリスがキョロキョロと家の中を見渡した。

「2かいにいるのかも・・・。」

トコトコトコ・・・

アヴィスとアリスは階段を上っていった。

「スウ・・・スウ・・・スウ・・・。」

二階を上がったすぐの廊下でビスと八志智は眠っていた。

「どうしてこんなところで寝てるのかしら？とりあえず、持ち運べそうにないから毛布か何か持ってきますわ。」

アリスは部屋に入ってしまった。

「チヨコ・・・・・・ココおいとくね」

アヴィスはそつと二人のそばにチヨコを置いた。

『ヤシチへ いつもありがとう！！』

大きなチヨコにはそう書かれていた。

「次のターゲットはアレ？」

「ソウ、アレ。シバラク 監視 シヨウ。」

夕日に照らされた二つの細長い人影があった。

第十二話に続く・・・

第十二話 きっかけ

こころこ 第十二話 きっかけ

「なんで、わらわがこのような格好を．．．。」

今日は、椿が黒豚のぬいぐるみのようだ。

「今日、アリスはどうしたんだ？」

八志智が訊いた。

「どっか出かけた。」

「なんかね、すっごいかなしそうなおかおしてたから、身体つかわせてあげてるの。」

ぬいぐるみ姿のビスとアヴィスが答えた。

「ふん．．．。」

八志智は軽く受け流した。

「．．．．．。」

電柱の上で翼をなびかせながら、アリスは膝を抱えて座っていた。

「どうしたんだ．．．？こんなところで？」

声に気付き、見渡すと隣の電柱に宗助が立っていた。

「なんだ．．．宗助かあ。あなたこそどうしてこんなところにいるんですの？」

アリスはがっかりしたように首を引っ込めた。

「フェニックス探そうと思ってレーダー通りに来たらまた外れて天使の波動をキャッチ、どんな天使かと思えば君だったってわけ．．．
・こんな説明で満足したか？」

宗助が皮肉を言った。

「．．．．．。」

アリスの顔はまた下を向いた。

ブッ

いきなり宗助がペットボトルを投げてきた。

「なっ！」

パシッ

アリスはそれを両手でキャッチした。

「さっき買った炭酸ジュース！酒の方がよかったか？」

宗助がふざけていった。

「……………ありがと。……………ねえ、前に言ってたわよね、天使は嫌いだって……………どうして？」

アリスが突然質問した。

「……………それ話すと長くなるけどいいのか？」

「……………。」

アリスはただ宗助の顔を見つめていた。

「……………うちの家系は妖怪とか霊とかのアヤカシに詳しいんだ。天使とフェニックスもアヤカシの一種だと考えられてる。……………」

それで蔵の中から天使の鍵を妹が見つけた。曾祖父がしまっておいたらしい。それを妹はお守りとして持ち歩くようになった。でも、

天使に願い事することはなかった。

今から2、3年前のことだった。俺の乗ってた電車が脱線事故を起こした。俺は血だらけで身体は動かず、目を開けるのが精一杯だった。病院に運ばれたのは何時間も後で、そのときには意識が朦朧としてた。

何日かして目を覚ましたら、身体は何事もなかったように治っていた。手術を受けた跡もなかった……………。医者に訊いたら奇跡と言われた。

でもその頃から妹の様子がおかしくなって、医者に診てもらった。そしたら、胃に小さな腫瘍があった。胃癌だった。早期発見できたからよかったけど再発を何度も繰り返し返してる。

妹は天使に願いをしたらしい。俺の怪我を治すために……………。そ

して対価を支払った。“抵抗力”という対価を……。」

「つまり病気への“抵抗力”ですわね。」

「そう。もちろん、自分のせいだから自分を責めた。けど、そんなことしても妹の病気は治らない。だからここにいて、フェニックスを探してる。フェニックスの血さえあれば“抵抗力”も回復するはずだ……。」

宗助の顔が影に隠れて見えない。

「あなた、偉いわね。ちゃんと妹のために努力してる。普通の子じゃ見守るくらいしかないわよ。」

アリスの顔が少し明るくなった。

「……今度は俺の質問。なんでそんな悲しそうな顔してるんだ？」

さっきまでの明るさがいきなり静まり返った。

「親友……親友がいたの。人間だった頃。けど……最後の最後で裏切られちゃった。」

遠くを見ながらアリスが話し始めた。

「いつもわたくしの相談に乗ってくれて、いつもわたくしのそばにいてくれて、本当に良い親友だった。でも、人って急に変わっちゃう。良い方に変わる人もいるけど、彼女は違った。悪いほうに変わった。わたくしが知らないだけで始めから悪かったのかもしれないけど……。彼女から守りたい“モノ”があった。けど、わたくしはもう息を引き取っていた。だから、わたくしは早く人間に戻ってその“モノ”を守りたかった。っていつても“現在”じゃもう彼女も守りたい“モノ”も失くなってるけど。こんなことなら来世で人間になるの待ってたほうがよかったかなあ……。なんてね。」

「偉いと思うよ。守りたい“モノ”のために来世になるの断つちやっただからさ。俺より数倍は偉いと思う。」

宗助が笑った。偽りのない笑顔だ。

「励まされちゃった……。わたくしの方が大人ですよに……」

あははっ。」

アリスが宗助の笑顔につられて笑った。

「励まし返したただだよ。さて、帰りますか!」

宗助はいつのまにか下ろしていた腰を上げた。

「わたくしも帰らないとみんな心配しますわね。」

アリスも立ち上がり、お尻についたゴミを掃った。

「……………」

「ん?どうかしたんですの?」

宗助がアリスを見ている。

「いや、賑やかそうな家で楽しそうだなって……………」

宗助がはにかんだ。

「……………!!いい考えがありますわ!!」

「ただいま帰りましたわー!」

アリスが玄関で叫んだ。

「おかえ……………なんで宗助がいるんだ?」

八志智がアリスの後ろを見ると、今にも逃げ出しそうな宗助をアリスの左手がガツシリと掴んでいるのは見えた。

「そのことなんだけど、一人のアパート暮らしてお金掛かるし、寂しいし、ってことで、二階にもう一部屋空いてたでしょ?そこに宗助住ませてあげるのどうかなあ?って思いましたの。もちろん、食費など必要な経費は払っていただきますわ!!この案に賛成は人?」

「はあゝい、さんせゝい!!」

「アヴィスが賛成なら俺様も賛成!」

「いいんじゃないくて、わらわには関係ないしな。」

「ってことで賛成多数なので可決ですわゝ!!」

「ええ……………!!」

八志智と宗助が声を上げた。

「異議を唱えるものはビスの操る能力であゝんなことやこゝんなことをすることになりますわよ。で、異議がある人派？」

アリスが奇妙な笑みを浮かべている。

「い、いえ、ありません。」

八志智と宗助が声を合わせて言った。

「それじゃあ！さつさと荷物運びなさい！！わたくしは夕食の準備をしますわ！」

「ええ〜〜〜〜！」

みんなはぶつくさ言いながら宗助のアパートに向かった。

「あの子邪魔だな。」

「削除シタ方が効率的ネ。」

遠くの空で誰かが会話をしていた。

第十三に続く・・・

第十二・五話 書庫

こころこ 第十二・五話 書庫

『あれ？アリスは？』

夢の中で目を覚ますとアリスの姿がなかった。

『さあ？』

アヴィスが目をこすりながら言う。

『一人になりたいんだろっ……して、今日は何で遊ぶ気じゃ？』

椿が言う。

『アヴィスえほんよみた〜い！！』

アヴィスが手を上げていった。

『絵本なら地下に書庫があったな。ってことで書庫にレッツゴー！！』

ビスが元気よく言った。

『くものすハッケ〜ン！！』

アヴィスが蜘蛛の巣を手に取り、ビスに近づけた。

『アヴィス、本読みに来たんだろ？』

ビスが呆れている。

『そだった！！ん？』

アヴィスの目に一冊の本が光って見えた。

『このほん、きれ〜！！』

アヴィスはその本を手を取った。背表紙にも表紙にもタイトルは示されていない。

『これ何語で書かれてんだ？日本語でも英語でもねえぞ！！』

ビスがパラパラとページを捲った。

『貸せ、わらわが読む。』

椿が本を取り上げた。

『おまえ、読めんのか？』

ビスが尋ねた。

『わらわに不可能などと言う言葉は存在せぬ。読むぞ。』

むかしむかし あるところにひとりの おんなのひと がいました。

おんなのひとは 騎士になり 功績を認められ 王子の目に 留まりました。

おんなのひとは 王子に好かれ お姫さまになりました。』

『なんかものすごく省略してある話だな……。』
ビスが言った。

『しー。しずかにしないとときこえないよ。』

アヴィスが注意した。

『お姫さまには 一つの命 がやどりました。』

そのため お城から遠くはなれた お屋敷に 住むことにしました。

生まれたのは おんなのこ でした。

お姫さまは おんなのこを かわいがっていました。

おんなのこは よく 鏡の前で 操り人形を 踊らさせたり

お庭の 花畑で 花のかんむりを 作ったり していました。

おんなのこが 成長してきたので お姫さまは おんなのこを
つれて

お城へ 帰ることに しました。

お城へ 帰ると 近くの お屋敷で 仮面舞踏会を してしまし
た。

お姫さまは ひさびさに パーティーへ 行きたくまりました。

おんなのこを 寝かせ だれにも 気付かれぬよう こっそり
とお城を 抜け出しました。

お姫さまは 仮面をかぶり パーティー会場へ入りました。

そこには たくさんの貴族が 楽しそうにおしゃべりしたり 踊
っていました。

お姫さまも 曲に合わせて たくさんの男の人と踊りました。

踊りにつかれたお姫さまは バルコニーへ向かった。

バルコニーは涼しく 心地よい風が吹いていた。

そこへ 一人の貴婦人がやってきた。

手すりにすがっているお姫さまに近づいてきた。

すると お姫さまの肩を

ドンッ

と 勢いよく押した。

お姫さまは バルコニーから落ちた。

落ちる直前 お姫さまは 貴婦人の仮面をとった。

貴婦人はお姫さまの親友だった。

お姫さまの目には 涙があふれました。

レンガの地面にたたきつけられる前に お姫さまは 願った。

おんなのこを 守りたい と・・・。

そのときだった。お姫さまには 赤いツバサが見えた。

ふと お姫さまが目を開けると 何もない 何も見えない 世界が広がっていた。

ただ 赤いツバサの 大きな鳥だけが その世界にいた。

お姫さまは 大きな鳥に言った。

生き返りたい と。

大きな鳥が言う。

「それは無理だ。しかし、人間にしてあげることにはできる。しかし、それには対価が必要だ。しかし、おまえは死者。あまり価値のない存在だ。それに、記憶をもらってしまったら守りたい“モノ”も守れなくなる。」

大きな鳥は お姫さまが生き返りたい理由を知っていた。

お姫さまは 身体と名前という対価を支払った。

けれども 大きな鳥が言うように 死者の“モノ”にはあまり価値がない。

「おまえが人間になるための対価の残りを支払う“モノ”が来る“トキ”をしばし待つが良い。」

大きな鳥がツバサを広げるとお姫さまは眠ってしまった。

お姫さまが目覚ますと何年もの月日が過ぎていた。

お姫さまは お城をこつそりとのぞきに行った。

お城からはよろこびの鐘が鳴り響いていた。

「二人目のおとこのこさまがうまれたぞ！」

「また生まれたの？勘弁してちょうだい。またそのせいで税が高くなるかもしれないわ。あのお妃さまになってからどんどん税が高くなって……。」

「わたしは前のお妃さまの方がよかったんだけどねえ……。」

「うわさじゃ 今のお妃さまが王子を奪うために前のお妃さまを・
・・。」

「今のお妃さまならしそうなことね。」

城下町からも噂話の声が聞こえてくる。

お城の大広間に行くと 王子と女の人が椅子に座り 貴族や新聞記者たちに話をしていた。

女の人の胸には 赤ちゃんを抱いていた。

王子の足元には 5、6歳くらいのおとこのこが指をしゃぶって王子のすそを掴んでいた。

お姫さまは 王子が再婚したことに気付きたくなかったが気付いてしまった。

恐る恐る 王子の隣に座っている女の人を見た。

すると あの親友だった。

お姫さまは 悲しみのあまり 倒れこんだ。

さわわ・・・

風が頬を伝った。 それとともに かすかな花の香りがした。

あのこはどこだろう？

お姫さまは おんなのこを探すため 城中を歩き回った。

思い出のいっぱいつまったお屋敷も探した。

けれど 見つけることはできなかった。

お姫さまは 大きな鳥のところへ帰った。

すると “モノ” と “モノ” が大きな鳥に願い事をしていた。

「ご主人様が亡くなった。だからココに来た。」

「ご主人様といっしょの人間になりたいの。」

“モノ”たちもお姫さまといっしょで人間になりたいらしい。

「なぜ人間になりたい？」

大きな鳥が質問した。

「ご主人様はよく悲しそうな顔をしてた。けど、お母様といっしょのときはものすごくうれしそうに笑った。その笑顔を見るとなぜかは分かんないけど暖かくなった。たぶん、癒されたんだと思う。だから、俺様も何でもいい、どんな“モノ”でもいいから癒してあげたい。人間になればそれができると思った。……理由はそれだけ。」

「よろしい。しかし、対価は支払ってもらうぞ。」

“モノ”たちはキオクという対価を支払った。

「おまえたちはまだ作られて間もない“モノ”。つまりこの対価はあまり価値のあるものではない。そこで、三人で一つの“身体”を授けよう。」

「三人？」

“モノ”たちは聞き返した。

「もう一人はそこにいる“モノ”だ。」

大きな鳥は お姫さまの方を示した。

「それでは おまえたちには この“身体”を与えよう。“身体”の主から身体をもらう対価として黄泉の世界へ行かせた。キオクを失った“モノ”には分からないだろうが、おまえは見覚えのある“身体”かもしれないな。」

その身体はお姫さまが一番愛して 何よりも一番守りたかった人の“身体”だった。

お姫さまの目から大粒の涙が溢れた。

「毒殺され、花畑に埋められていた。」

お姫さまは “身体”をギュッと抱き寄せた。

“身体”の主からおまえに与えてほしいと言っていた。名前と共に……。

つまり、おまえの今日からこの子の名前を名乗りなさい。

それと、今度は自分のために、自分のしたいことをして生きてほしい……との伝言だ。」

大きな鳥は そう言うつと “身体”に “モノ”たちを宿らせ 命を吹き込んだ。

お姫さまは誓った。

自分に嘘をつかないこと 自分を愛し 自分も愛する人と結婚すること

そして 今度こそは 愛する人を守り抜くことを・・・

本にはここまでしか書かれておらぬ。後は全て白紙じゃ。』
椿が本を閉じた。

『えつぐ・・・えつぐ・・・』

アヴィスとビスが泣いていた。

『なにを泣いているのだ？』

椿が冷めた視線で見ている。

『だつてえ・・・うわああああん』

いきおいよく泣き出した。

『呆れた童たちだ・・・。さて、アリスはどこへ行ったのやら・・・。
』

屋敷の庭の花畑にぽつんとアリスが立っていた。

『今日が命日よね・・・。』

だから、アリス・・・会いにきたよ。』

アリスは笑った。目には大粒の涙を浮かばせて。
目の前には他の場所よりもたくさんの花が咲いていた。

第十三話に続く・・・

第十二・五話 書庫（後書き）

長い文章になってしまい、すいませんでした。

第十三話 桜舞う中で

こころこ 第十三話 桜舞う中で

「今日から3年生かぁ・・・実感がわかねえな・・・。」
学級会で入学式の話をしている中、八志智が呟いた。

「クラス替えも今年はなかったしな。また奈留たちと一緒にかよ・・・はぁ・・・。」

ため息をつきながら、額に手を当てた。

「・・・それでは、みんなそれぞれの役割を始めてください。」
飯の学級委員長がそう言うと、みんな立ち上がって教室から出ていった。

「アヴィスちゃんと鈴ちゃんと宗助と八志智と私は体育館裏の雑草抜きよー!!」

今日も奈留は、張り切っている。

（めんどくさっ・・・しかし、やらないと生徒指導室に呼ばれてわけのわかんねえ作文書かされるんだろうなあ・・・。）

八志智は渋々体育館に向かった。

「そういえばさ、近頃エリーザちゃん見ないね。アヴィスも見えない？」

雑草で泥のついた手を掃いながら、奈留が訊いた。

「みてないよ。」

アヴィスの制服に泥が付いているが本人は気にしていないようだ。

（クリスマス以来、エリーザの姿を見なくなった。フェニックスの言いつけで自分から戦えなくなったからだろう・・・。まあ、そのおかげで平和だが・・・。）

キンコーンカーンコーン

「チャイムが鳴った。んじゃ雑草抜きはここまで！みんな、手洗いにGOー！」

奈留はダツシュで蛇口に突撃した。

（学校と部活が終わって奈留たちと別れた後、アヴィスと宗助と俺はいつも通りの軽い冗談を交えながらの授業の話や先生の愚痴をしながら帰り道の桜並木に差し掛かった。）

「それがね……！！！」

アヴィスがいきなり話を止め、立ち止まった。冷めた顔をしている。「どうし……！！！」

宗助も何かの気配を感じ取ったらしい。

スウツ……

桜の木から誰かが下りてくる。足が浮いている、天使のようだ。しかも二人だ。

「僕はオルビー。」

「ワタシハ ネオン。」

オルビーとネオンは八志智たちの方に軽く会釈した。

「さっそくで悪いんだけど……アヴィスさんだっけ？今、遂行中の契約を破棄してほしいんだけど、ダメ？」

「??」

アヴィスは状況が分からなくて困っている。

「破棄シナイト、ワタシタチノ契約ノ邪魔ニナル。ソノ場合、アナタヲ削除スルコトニナリマス。」

ネオンが片言な喋り方と言った。

「さくじょ……ってなに？」

アヴィスには削除の意味が分からないらしい。

「こうゆうことさっ……！！！」

シュツ カランツ……

アヴィスの頬擦れ擦れを何かが通り過ぎ、地面に当たる音がした。

最初は虫かと思っただが、振り返って見ると、コンクリートに切れ目が入り、10cmくらいの長さの針が突き刺さっていた。

「この針には猛毒が仕掛けてある。まともに二度食らえば確実に死ぬ。・・・時間をやろう。次に会うまでには破棄する準備をして

おけ・・・。」

そう言っていると、オルビーとネオンは飛び去っていった。

「・・・・・・。」

アヴィスたちはただ、その場で立ち尽くすだけだった。

第十四話に続く・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1942d/>

こころこ

2010年10月9日02時53分発行